

# 斐伊川放水路建設予定地内発掘調査 報告書Ⅲ

大井谷Ⅰ遺跡

大井谷Ⅱ遺跡

2001年 3月

国土交通省中国地方整備局出雲工事事務所  
出 雲 市 教 育 委 員 会

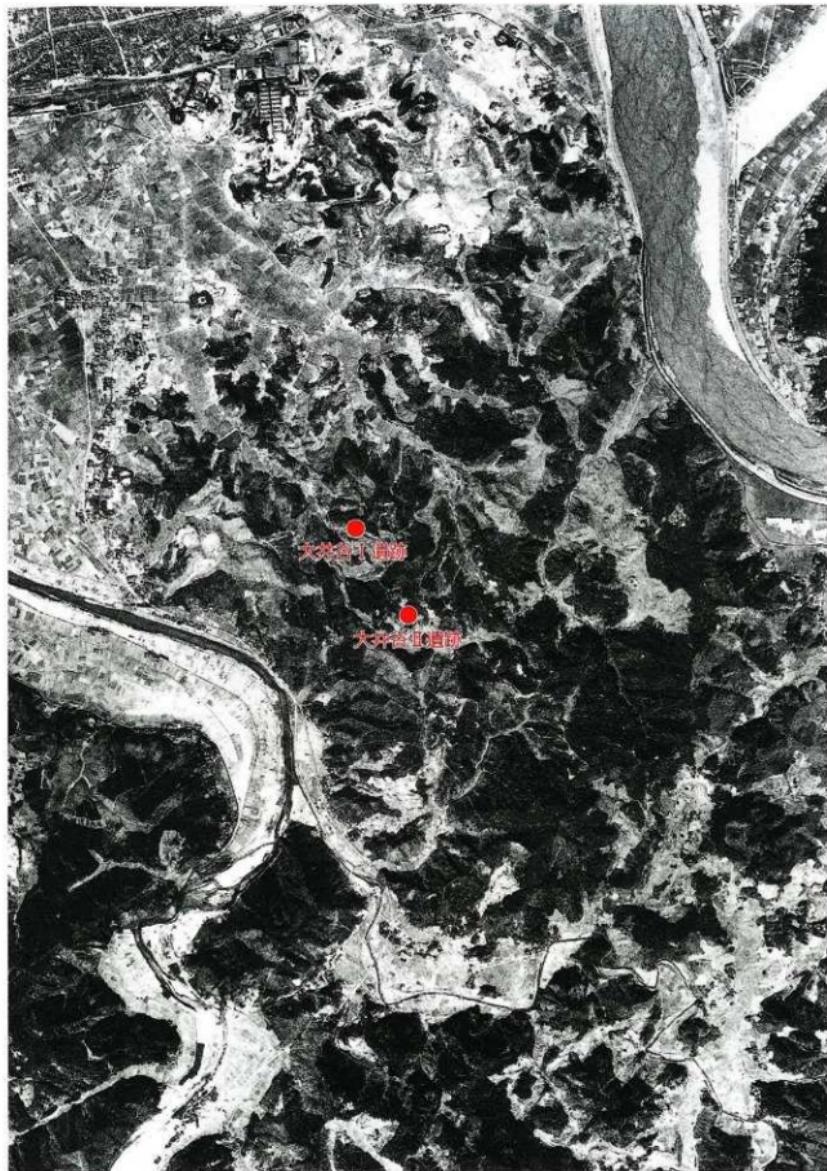
# 斐伊川放水路建設予定地内発掘調査 報告書Ⅲ

大井谷Ⅰ遺跡

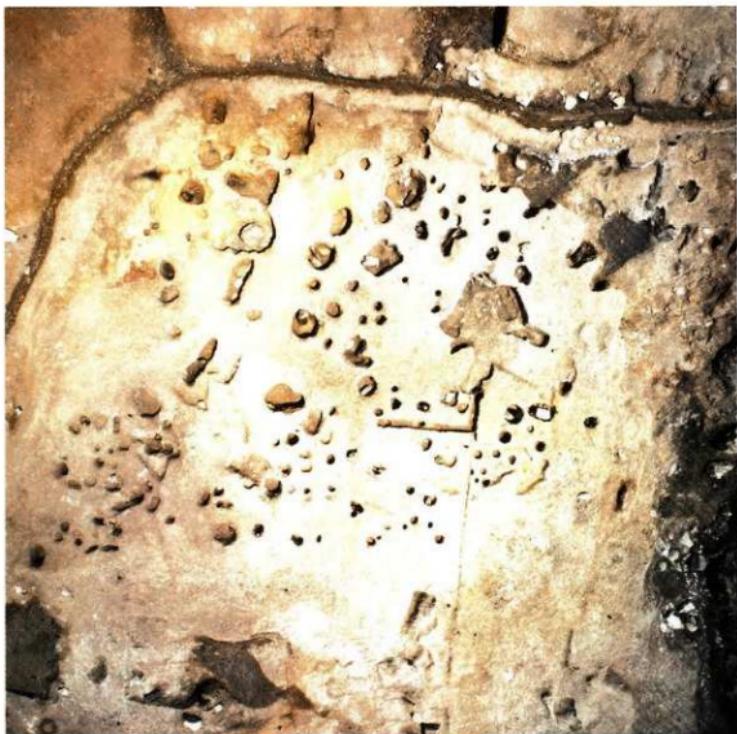
大井谷Ⅱ遺跡

2001年 3月

国土交通省中国地方整備局出雲工事事務所  
出 雲 市 教 育 委 員 会



米軍空撮写真（斐伊川放水路建設予定地周辺）



大井谷Ⅱ遺跡　掘立柱建物跡



大井谷Ⅱ遺跡 池状遺構

# 序

国土交通省出雲工事事務所では、斐伊川・神戸川流域の抜本的な治水対策として斐伊川放水路事業を推進しています。

事業の実施に際しては、埋蔵文化財の保護にも十分留意しつつ関係機関と協議しながら進めていますが、現状保存の困難な埋蔵文化財については必要な調査を実施し、記録保存を行っています。

当事務所では放水路の早期完成を目指し、平成8年度から出雲市教育委員会にご協力をいただいて調査を行っています。今回は、試掘調査によって新たに発見された大井谷Ⅰ遺跡、大井谷Ⅱ遺跡について調査していただいたところです。

国土交通省出雲工事事務所といたしましては、今後も出雲市教育委員会と調整を図りつつ、貴重な埋蔵文化財の保存のため、調査を円滑に進めていきたいと考えており、本報告書が埋蔵文化財に対する一層の关心とご理解を得るための一資料としてお役立ていただければ幸いに思います。

最後に、今回の発掘調査及び本書の発刊にあたり、ご協力いただいた出雲市教育委員会ならびに関係各位に対し、こころから厚くお礼申し上げます。

平成13年3月

国土交通省中国地方整備局  
出雲工事事務所

所長 五道仁実

# 序

出雲市教育委員会では、平成8年度から建設省中国地方建設局（現：国土交通省中国地方整備局）より委託を受け、斐伊川放水路建設予定地内における埋蔵文化財の発掘調査を実施しています。

斐伊川・神戸川の二大河川を結ぶ放水路建設事業地内は、県内でも有数の遺跡密集地であり、これまでにも同事業において全国最大規模の横穴墓群として知られる上塩治横穴墓群や墳丘内に石製骨蔵器を納めた光明寺3号墓などの調査を行ってきました。

本書は、平成10年度から平成12年度に発掘調査を実施した遺跡のうち、上塩治町の大井谷Ⅰ遺跡と大井谷Ⅱ遺跡について、その調査結果をまとめたものです。特に、大井谷Ⅱ遺跡では中世の掘立柱建物跡や石段構造を検出したうえ、土器や陶磁器、鉄器など大量の遺物が出土するなど、出雲地域の中世のひとびとの暮らしを知るうえで貴重な資料を得ることができました。本書が地域の埋蔵文化財に対する理解や歴史解明に多少なりとも役立てば幸いに存じます。

最後に、発掘調査及び本書の刊行にあたり、ご協力を賜りました地元の方々や国土交通省中国地方整備局出雲工事事務所をはじめ、各方面からご支援、ご協力をいただきました関係各位に衷心より御礼申し上げます。

平成13年3月

出雲市教育委員会

教育長 多久 博

## 例　　言

1. 本書は、中国地方建設局（現：中国地方整備局）の委託を受け、出雲市教育委員会が平成10年度から平成12年度にかけて実施した大井谷Ⅰ遺跡、大井谷Ⅱ遺跡の発掘調査報告書である。

2. 発掘調査は、下記の期間において実施した。

大井谷Ⅰ遺跡……………平成10年（1998）5月27日～平成11年（1999）1月28日

大井谷Ⅱ遺跡……………平成10年（1998）12月1日～平成12年（2000）6月9日

3. 発掘調査を行った地番は、次のとおりである。

大井谷Ⅰ遺跡……………出雲市上塩治町3002-1 ほか

大井谷Ⅱ遺跡……………出雲市上塩治町1319 ほか

4. 調査は、次の組織で行った。

平成10年度

〔調査指導者〕西尾 克己（島根県教育委員会文化財課主幹）、守岡 正司（同 主事）

〔事務局〕後藤 政司（出雲市教育委員会文化振興課長）、川上 稔（同 課長補佐）

〔調査員〕岸 道三（出雲市教育委員会文化振興課副主任主事）

　　遠藤 正樹（同 主事）、今岡 ひとみ、矢田 知美（同 臨時職員）

平成11年度

〔調査指導者〕足立 克巳（島根県教育委員会文化財課主幹）

　　椿 真治（同 文化財保護主事）

〔事務局〕大山 茂（出雲市教育委員会文化振興課長）、川上 稔（同 課長補佐）

〔調査員〕岸 道三（出雲市教育委員会文化振興課副主任主事）

　　遠藤 正樹、坂本 豊治（同 主事）

　　今岡 ひとみ、鬼村 奈津子、伊藤 めぐみ、糸賀 伸文（同 臨時職員）

平成12年度

〔調査指導者〕小田 時通（島根県教育委員会文化財課主幹）、池淵 後一（同 文化財保護主事）

〔事務局〕大山 茂（出雲市教育委員会文化振興課長）、川上 稔（同 課長補佐）

〔調査員〕岸 道三、遠藤 正樹（出雲市教育委員会文化振興課副主任主事）

　　坂本 豊治（同 主事）

　　鬼村 奈津子、伊藤 めぐみ、瀧尻 幸平（同 臨時職員）

5. 本書で使用した遺構略号は、次のとおりである。

SD—溝状遺構、SK—土坑状遺構、SX—落込み状遺構、P—ピット状遺構、SB—掘立柱建物跡

6. 本書で使用した方位は磁北を示す。
7. 本遺跡の出土遺物及び実測図、写真は出雲市教育委員会で保管している。
8. 本書掲載の遺物実測図及び写真撮影については、岸、遠藤、坂本のほか、片倉 愛美（文化振興課主事）、鬼村奈津子、伊藤めぐみ、瀧尻幸平、今岡司郎、今岡ひとみ、糸賀伸文（同臨時職員）が行った。
9. 本書の執筆、編集は岸、遠藤、坂本が行った。
10. 各遺跡の調査担当者は、次のとおりである。
- 大井谷Ⅰ遺跡……………岸 道三
- 大井谷Ⅱ遺跡 A区……………遠藤 正樹  
B区……………岸 道三  
C区……………坂本 豊治
11. 発掘作業（発掘作業員雇用、測量発注ほか）については、出雲市教育委員会から中国建設弘済会へ委託して実施した。
12. 発掘調査及び報告書作成にあたっては、以下の方々に御指導、御協力を賜った。
- 松井 章（奈良国立文化財研究所主任研究官）、村上 隆（同）、村上 勇（広島県立美術館学芸課長）、八峰 兴（鳥取県教育文化財団主任調査員）、岩本 正二（広島県立歴史博物館副館長）、藤沢 良祐（（財）瀬戸市埋蔵文化財センター事務局次長）、井上喜久男（愛知県陶磁資料館主任学芸員）、多々良美春（山口県立大学非常勤講師）、合田 芳正（中央大学、青山学院大学兼任講師）、古賀 伸幸（山口市教育委員会主査）、宮田 進一（富山県埋蔵文化財センター調査課長）、柴田 英樹（岡山県古代吉備文化財センター文化財保護主任）、間壁 忠彦（倉敷考古館館長）、下津間康夫（広島県埋蔵文化財調査センター主任調査研究員）、鈴木 和子（青森県教育委員会主事）、篠原 芳秀（広島県立歴史博物館草戸千軒町遺跡研究所所長）、鈴木 康之（同 主任学芸員）、遠藤 浩巳（大田市教育委員会主任）、椿 真治（島根県教育委員会文化財保護主事）、西尾 克己、内田 律夫（島根県埋蔵文化財センター主幹）、広江 耕史（同 係長）、林 健亮、間野 大丞（同 文化財保護主事）、守岡 正司、目次 謙一（同 主事）、半石 充（島根県古代文化センター研究員）
13. 遺物整理、報告書作成作業については、次の方々に従事して頂いた。

石川 桂子 永田 節子 河井 栄子 田部 美幸 阿久津洋子  
荒木恵理子

# 目 次

巻頭図版

序 文

例 言

目 次

## 本文目次

I . 調査に至る経緯と経過 .....	(岸)	1
II . 位置と環境 .....	(遠藤)	5
III . 大井谷 I 遺跡 .....	(岸)	11
IV . 大井谷 II 遺跡		
1 . 試掘調査の概要 .....	(岸)	37
2 . A区の調査 .....	(遠藤)	39
3 . B区の調査 .....	(岸)	161
4 . C区の調査 .....	(坂本)	179
5 . 総 括 .....	(遠藤)	197
6 . 大井谷 II 遺跡出土の動物遺存体 .....	(松井 章)	200

# 挿図目次

## I. 調査に至る経緯と経過

第1図 発掘調査地位置図 ..... 2

## II. 位置と環境

第2図 出雲平野の遺跡 ..... 7~8

第3図 塩冶地区周辺の遺跡 ..... 9~10

## III. 大井谷I遺跡

第4図 大井谷I遺跡地形測量図(調査前) 12

第5図 D1~A1セクション図 ..... 13

第6図 P4火測図 ..... 15

第7図 SD01・SD02セクション図 ..... 16

第8図 1~3Gr遺構配置図 ..... 17

第9図 SX01実測図 ..... 18

第10図 P5実測図 ..... 19

第11図 P6火測図 ..... 19

第12図 4~7Gr遺構配置図 ..... 20

第13図 SD10実測図 ..... 21

第14図 P14実測図 ..... 22

第15図 8~11Gr遺構配置図 ..... 23

第16図 P12火測図 ..... 24

第17図 P15火測図 ..... 24

第18図 加工段実測図 ..... 25

第19図 12~15Gr遺構配置図 ..... 26

第20図 16~18Gr遺構配置図 ..... 28

第21図 出土遺物分布図 ..... 29

第22図 出土遺物実測図(1) ..... 30

第23図 出土遺物火測図(2) ..... 32

第24図 大井谷I遺跡地形測量図(調査後) 33

## IV. 大井谷II遺跡

### 1. 試掘調査の概要

第25図 試掘トレンチ位置図 ..... 38

## 2. A区の調査

第26図 大井谷II遺跡位置図(明治32年)  
帝国陸軍測図5万分の1 ..... 39

第27図 大溝01土層断面図 ..... 40

第28図 遺構全体図(調査終了後全体) 41~42

第29図 大溝02遺構図 ..... 43~44

第30図 大溝02出土遺物(1) ..... 45

第31図 大溝02出土遺物(2) ..... 46

第32図 大溝02出土古銭 ..... 46

第33図 大溝03土層断面図 ..... 48

第34図 大溝03出土遺物(1) ..... 49

第35図 大溝03出土遺物(2) ..... 51

第36図 大溝03出土遺物(3) ..... 52

第37図 大溝03出土遺物(4) ..... 53

第38図 大溝03出土遺物(5) ..... 54

第39図 大溝04土層断面図 ..... 55

第40図 大溝04黒褐色粘土I層  
出土遺物(1) ..... 57

第41図 大溝04黒褐色粘土I層  
出土遺物(2) ..... 58

第42図 大溝04黒褐色粘土I層  
出土古銭 ..... 59

第43図 大溝04明青灰色粘土  
(地山ブロック混入)

(黒褐色粘土I層・II層の間層)

出土遺物 ..... 59

第44図 大溝04黒褐色粘土II層  
出土遺物(1) ..... 61

第45図 大溝04黒褐色粘土II層  
出土遺物(2) ..... 63

第46図 大溝04黒褐色粘土II層  
出土遺物(3) ..... 64

第47図 大溝04黒褐色粘土II層

	出土遺物 (4) .....	66
第48図	大溝04黒褐色粘土Ⅱ層 出土古錢 .....	67
第49図	大溝04明青灰色粘土 (地山ブロック混入) (黒褐色粘土Ⅲ層・Ⅳ層の間層) 出土遺物 .....	67
第50図	大溝04黒褐色粘土Ⅲ層出土遺物 .....	68
第51図	大溝04黒褐色粘土Ⅲ層出土古錢 .....	69
第52図	大溝04黒褐色粘土Ⅳ層 出土遺物 (1) .....	70
第53図	大溝04黒褐色粘土Ⅳ層 出土遺物 (2) .....	71
第54図	大溝04黒褐色粘土Ⅳ層出土古錢 .....	73
第55図	大溝04褐灰色粘土 (地山ブロック混入) (黒褐色粘土Ⅴ層・Ⅵ層の間層) 出土遺物 (1) .....	74
第56図	大溝04褐灰色粘土 (地山ブロック混入) (黒褐色粘土Ⅴ層・Ⅵ層の間層) 出土遺物 (2) .....	75
第57図	大溝04黒褐色粘土Ⅴ層出土遺物 .....	76
第58図	大溝04黒褐色粘土Ⅴ層出土古錢 .....	77
第59図	大溝04黒褐色粘土Ⅰ～Ⅲ層 出土遺物 .....	77
第60図	大溝04黒褐色粘土Ⅳ～Ⅴ層 出土遺物 .....	79
第61図	大溝04その他の出土遺物 (1) .....	80
第62図	大溝04その他の出土遺物 (2) .....	82
第63図	大溝04その他の山上遺物 (3) .....	83
第64図	大溝04出土古錢 .....	84
第65図	SB01遺構平面図 .....	85～86
第66図	SB01遺構断面図 (1) .....	87～88
第67図	SB01遺構断面図 (2) .....	89
第68図	SB01出土遺物 .....	90
第69図	SB01周辺遺構出土遺物 .....	91
第70図	池状遺構・石敷遺構平面図 .....	93～94
第71図	水路遺構図 .....	93～94
第72図	池状遺構出土遺物 (1) .....	95
第73図	池状遺構出土遺物 (2) .....	96
第74図	池状遺構出土古錢 .....	97
第75図	SK02遺構図 .....	97
第76図	SK02出土遺物 .....	98
第77図	中世墓遺構図 .....	99～100
第78図	石段遺構 .....	101～102
第79図	SK01遺構図 .....	103
第80図	SK01出土遺物 .....	104
第81図	木橋遺構図 .....	105
第82図	SX03セクション .....	105
第83図	SX03遺構図 .....	107～108
第84図	SX03出土遺物 (1) .....	109
第85図	SX03出土遺物 (2) .....	110
第86図	遺物包含層出土遺物 (1) .....	111
第87図	遺物包含層出土遺物 (2) .....	113
第88図	遺物包含層出土遺物 (3) .....	114
第89図	遺物包含層出土遺物 (4) .....	117～118
第90図	遺物包含層出土遺物 (5) .....	119
第91図	遺物包含層出土遺物 (6) .....	120
第92図	遺物包含層出土遺物 (7) .....	121
第93図	遺物包含層出土遺物 (8) .....	121
3. B区の調査		
第94図	B区地形測量図 (1) .....	162
第95図	B区地形測量図 (2) .....	163
第96図	階段状遺構実測図 .....	165
第97図	石敷状遺構実測図 .....	166
第98図	石敷状遺構出土遺物実測図 .....	167
第99図	M15～M16Gr遺構配置図 .....	168
第100図	中世の遺構配置図 .....	170
第101図	I16～F16セクション図 .....	171
第102図	P14実測図 .....	172
第103図	P20実測図 .....	172

第104図 P34実測図 ..... 173

第105図 石垣状遺構実測図 ..... 174

第106図 B区出土遺物実測図 ..... 175

#### 4. C区の調査

第107図 C区東西上層図 ..... 179

第108図 大井谷C区調査区・土層図・180~181

第109図 C区調査終了後地形測量図 ..... 182

第110図 第19トレンチ出土遺物実測図 ..... 183

第111図 第20トレンチ出土遺物実測図 ..... 183

第112図 C区西上段1層

出土遺物実測図(1) ..... 184

第113図 C区西上段1層

出土遺物実測図(2) ..... 185

第114図 C区西斜面1層出土遺物実測図 ..... 185

第115図 C区下段1層出土遺物実測図 ..... 186

第116図 C区下段2層出土遺物実測図 ..... 187

第117図 C区下段3層出土遺物実測図 ..... 188

第118図 C区下段4層出土遺物実測図 ..... 188

## I . 調査に至る経緯と経過

## I. 調査に至る経緯と経過

斐伊川放水路建設予定地内における埋蔵文化財発掘調査については、建設省中国地方建設局（現：国土交通省中国地方整備局）の委託を受け、平成3年（1991）から島根県教育委員会が実施してきた経緯がある。しかし、事業予定地内は從来から埋蔵文化財の大密集地として知られているとともに、新たに発見される遺跡も多く、調査量の増大に伴って工事の進捗が遅れている状況にあった。

このような状況の中、平成7年（1995）に事業者である建設省と調査を委託されている島根県教育委員会から出雲市教育委員会に対し、同事業に係わる埋蔵文化財発掘調査の一部を担当してほしい旨の依頼があった。出雲市教育委員会では当該事業の重要性などを考慮してこれを受け、三者で協議を重ね、平成8年度から発掘調査の一部を担当することで合意した。なお、この際に発掘調査に係わる県・市の分担は、基本的に県教委が放水路開削部など本体部分、市教委が工事用道路や残土処理場などの周辺部分について調査していくことを確認している。

市教委の調査としては、まず出雲市上塩治町大井谷から三田谷へと迂回する工事用道路建設予定地から着手し、統いて大井谷の残土処理場へと移行していった。以下、本書で扱っている2遺跡について、経緯と経過をまとめておく。（第1図参照）

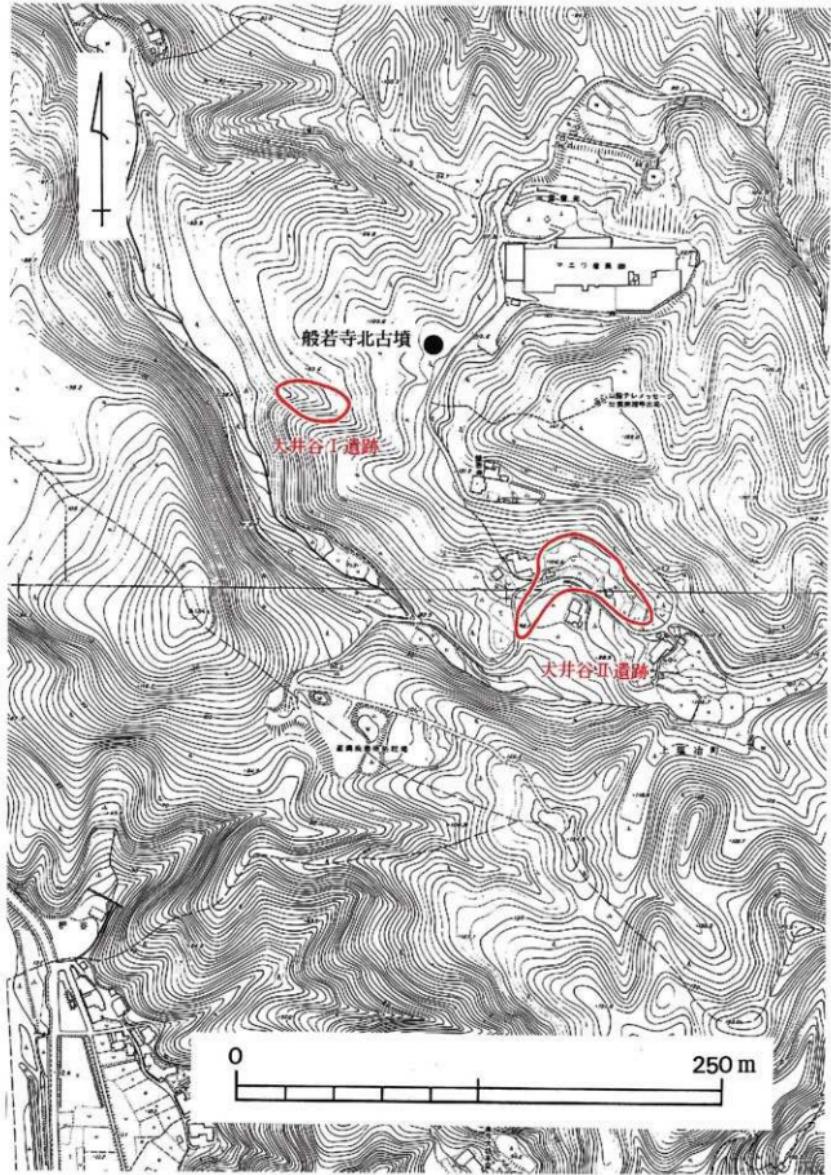
### 大井谷I遺跡

平成8年（1996）、建設省出雲工事事務所より島根県教育委員会に対して斐伊川放水路事業地内の大井谷の中間地点に位置する残土処理場における埋蔵文化財の有無についての照会があった。付近には全国的にも最大規模の横穴墓群として知られている上塩治横穴墓群や中世の山城である大井谷城跡などが存在する位置環境から、県教委では平成9年（1997）3月に試掘調査を実施した。その結果、事業予定地内的一部分で遺物が発見されたため、発掘調査を実施する必要が生じた。

その後、建設省出雲工事事務所と県教委、出雲市教育委員会の三者で協議を重ね、本調査については平成10年（1998）に出雲市教育委員会が実施することで合意した。

発掘調査に至る手続きについては、新発見遺跡であることから、遺跡発見の通知（文化財保護法第57条の6）を平成10年4月7日付で文化庁長官へ提出し、遺跡名を大井谷I遺跡とした。また、事業者である建設省出雲工事事務所からは、同年4月14日付で埋蔵文化財発掘調査の通知（同法第57条の3）が提出され、出雲市教育委員会では埋蔵文化財発掘調査の報告（同法第98条の2）を同年6月1日付で文化庁長官へ提出している。

調査地は、標高約71m～90m付近の丘陵斜面という立地と、傾斜によって遺構が検出しにくい状況ではあったが、平成11年（1999）1月28日に調査を終了した。なお、調査終了後に埋蔵文化財発見届（遺失物法第13条）、埋蔵文化財保管証をそれぞれ出雲警察署、島根県教育委員会に提出している。



第1図 発掘調査地位置図

## 大井谷Ⅱ遺跡

平成9年（1997）、建設省出雲工事事務所より、大井谷の谷奥に位置する残土処理場予定地における埋蔵文化財の有無について照会を受けた。事業予定地付近には、大井谷Ⅰ遺跡や般若寺北古墳などの遺跡が存在しているうえ、全国最大規模を誇る上塙治横穴墓群がさらに広がる可能性もある位置環境から、試掘調査によって遺跡の有無を確認することとした。

試掘調査は、平成10年（1998）4月から5月にかけて20ヵ所のトレンチを設定して行った。その結果、谷状地形に設定したトレンチから土師器や須恵器、陶器などが出土したうえ、谷状地形から一段高い平坦地に設定したトレンチからも一部遺物が出土し、計9ヵ所のトレンチから遺物が確認された。

試掘調査の結果から、事業者である建設省出雲工事事務所と出雲市教育委員会で協議を重ね、約7,500m<sup>2</sup>について発掘調査を実施することで合意した。そして、平成11年（1999）から調査を開始することを確認している。

発掘調査に至る手続きについては、新発見遺跡であることから、遺跡発見の通知（文化財保護法第57条の6）を平成10年6月4日付で文化庁長官へ提出し、遺跡名を大井谷Ⅱ遺跡とした。また、事業者である建設省出雲工事事務所からは、同年11月19日付で埋蔵文化財発掘の通知（同法第57条の3）が提出された。出雲市教育委員会ではこれを受けて、埋蔵文化財発掘調査の報告（同法第98条の2）を同年12月1日付で文化庁長官へ提出している。

発掘調査地は広大であるため、便宜上、道路や段差によって区分し、それぞれA～C区の3ヵ所に分けて行った。A区は平成10年（1998）12月から調査を開始し、B・C区については平成11年（1999）に調査に着手している。そして、平成12年（2000）6月4日に現地説明会を行い、6月9日に大井谷Ⅱ遺跡の調査を全て終了した。なお、調査終了後に埋蔵文化財発見届（遺失物法第13条）、埋蔵文化財保管証をそれぞれ出雲警察署、島根県教育委員会に提出している。



## II. 位置と環境

## II. 位置と環境

南北の山系に挟まれた出雲平野は、島根県の東部、宍道湖の西側に位置する沖積平野で、斐伊川と神戸川の沖積作用により、出雲市、平田市、斐川町・湖陵町にまたがる広い範囲に平野が形成されている。しかし、現在の出雲平野の様相を呈するようになったのは、近世になってからのことである。

旧石器・縄文時代においては縄文海進によって、出雲平野のほとんどが海になっていたことが明らかになっている。この縄文海進が海退へと移っていくのは縄文時代の晩期になってからであり、その影響でその後は徐々に陸地が現れるようになる。

出雲平野における旧石器時代の遺跡は現在のところ発見されていない。

もっとも古い遺跡として、出雲平野の北に位置する菱根遺跡や西側の砂丘下に形成された上長浜貝塚が縄文時代早期末に出現する。その後も縄文時代前期末から中期かけて上ヶ谷遺跡（斐川町）が知られるのみでほとんど人間の活動の様子を知ることはできない。

後期から晩期にかけては、平野の縁辺部に遺跡が営まれる傾向はそれまでと変わらず、平野南部には丸木舟が出土した三田谷Ⅰ遺跡、平野南西部には御領田遺跡（湖陵町）・三部竹崎遺跡（湖陵町）・平野南東部には後谷遺跡（斐川町）が出現する。一方、平野中心部においては矢野遺跡・善行寺遺跡などの遺跡から、後期から晩期の遺物が出土している。

弥生時代前期においては縄文時代より引き続き営まれる遺跡が多く、平野縁辺部を中心として遺跡が営まれる。最近の調査では、古志本郷遺跡で溝跡が確認されている。

中期になると斐伊川・神戸川の氾濫による流路の変化や沖積作用によって形成された3カ所の微高地に集落が営まるようになる。その中でも古志本郷遺跡・天神遺跡・下古志遺跡は、環濠の存在が明らかになっており、環濠集落としての大きな居住地が形成されていたと考えられている。

後期になると、これらの集落遺跡の隆盛を背景として出雲平野南側丘陵上に西谷墳墓群が出現し、四隅突出型墳丘墓の築造が始まる。西谷墳墓群では合計6基の四隅突出型墳丘墓が築造されており、その中でも島根大学考古学研究室によって発掘調査が実施された西谷3号墓では、その出土土器より古備や北陸との交流があったことが指摘されている。

古墳時代前期になると、それまで栄えてきた集落が衰退していく。この原因は未だ判明していないが、前期古墳があまり多く築造されないことがそれを裏付けている。

中期に入ると平野南側丘陵周辺では三田谷Ⅰ遺跡が営まれ、平野南西部には浅柄遺跡、平野中心部には中野美保遺跡に人々の住んでいた形跡がある。前期に衰退した平野中心部の遺跡からは若干中期後葉の土器が出土しているため、このころから平野縁辺部に住んでいた人々が平野部へ再進出していった可能性がある。

墓制については古墳時代に入ると墳墓の築造が激減する。現在、出雲平野における前期古墳は平野北東部の縁辺に築かれる大寺古墳（前方後円墳）、平野西側の神西湖東岸に築かれる山地古墳（円墳）、西谷墳墓群の一角にある西谷7号墓が知られるのみである。

そして、中期に入っても北光寺古墳・西谷15号墳・16号墳が築造されるものの、古墳の数はあまり

増加しない。

後期に入ると多くの古墳が築造されるようになり、神戸川東岸には今市大念寺古墳、上塩治墓山古墳、地蔵山古墳といった首長墓が連続して築造され、神戸川西岸の丘陵上には妙蓮寺山古墳、放れ山古墳、小坂古墳といった古墳が次々と築造される。

終末期になると徐々に古墳の数は減り、横穴墓の築造が主流となる。特に古墳時代後期より造られた始めた神戸川西岸の神門横穴墓群（約100穴）と東岸の上塩治横穴墓群（約180穴）は全国最大規模の横穴墓群で、終末期における2大墓域としての性格を持つと思われる。しかし、最近の調査では上塩治横穴墓群の周辺で三田谷2号墳・3号墳、光明寺4号墳、大井谷古墳、狐瀬谷古墳といった後期から終末期にかけての古墳が次々と確認されており、全ての古墳が横穴墓に取って代わられたわけではないことを示している。

現段階では古墳時代後期・終末期の集落跡はほとんど発見されていないが、こういった今市大念寺古墳をはじめとする首長墓の出現や後期古墳の増加、横穴墓の盛行などを考えると、人口も増加し、集落が盛行していたのである。

古代において出雲平野には神門郡と出雲郡の2行政区画が定められた。この「郡」を統括していた官庁が「郡家」である。発掘調査の成果により神門郡家は古志本郷遺跡、出雲郡家は後谷遺跡（斐川町）周辺に比定されている。このほか天神遺跡、三田谷I遺跡でも官衙関連の遺構、遺物が検出されている。

また、733年に編纂された『出雲國風土記』によると神門郡には二所、出雲郡には一所の新造院が建立されているとの記述がある。出雲平野における古代寺院は現在、神門寺境内魔寺（神門郡朝山郷新造院？）天寺平魔寺（斐川町）（出雲郡河内郡新造院？）が考えられている。

古墓としては、朝山古墓、小坂古墳等で石櫃が知られているが、最近の調査では、石製骨蔵器直葬でありながら埴丘を持ち、古墳時代の要素を色濃く残した火葬墓である光明寺3号墓が確認されている。奈良時代になると若干海進があり、出雲國風土記に記載のある「神門水海」が平野の内部に広がっており、斐伊川・神戸川ともここに注いでいたようである。

中世に入ると、平野中央部では藏小路西遺跡、渡辺橋沖遺跡、矢野遺跡などの屋敷跡が知られる。これらはそれぞれ12世紀後半～15世紀前半頃、13～14世紀頃、14～15世紀頃で、特に藏小路西遺跡については中世朝山家惣領家の可能性が指摘されている。

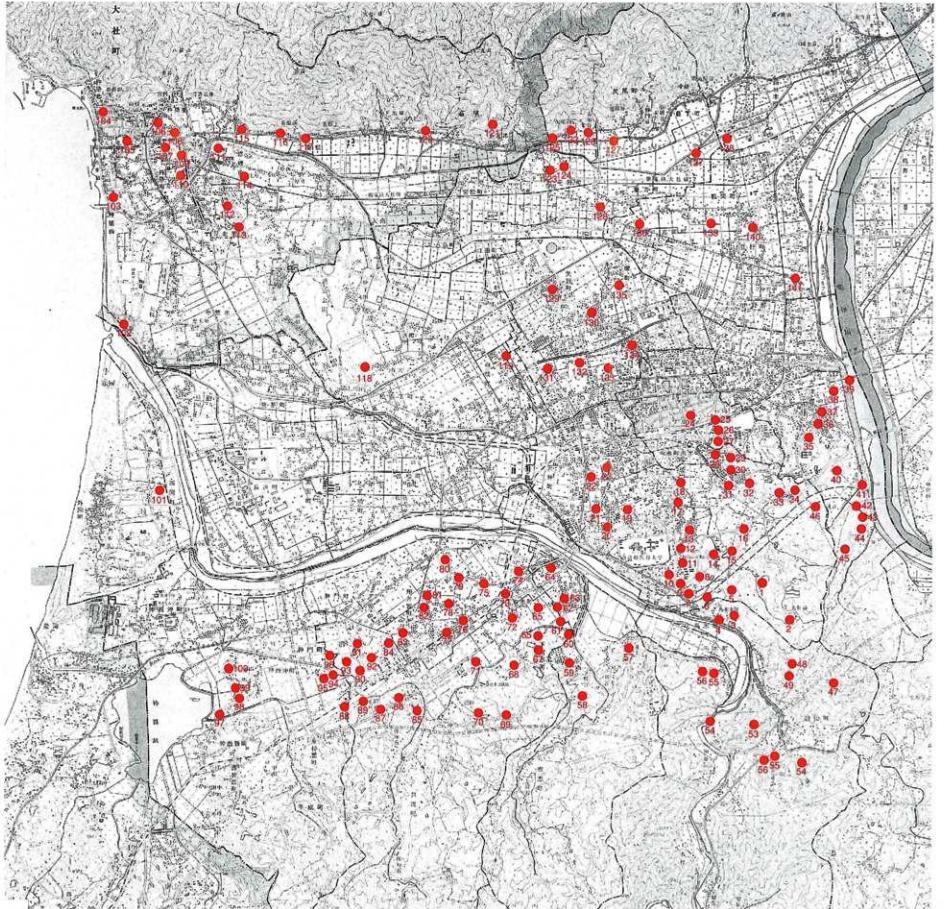
古墓としては龍泉窯青磁が出土している荻秆古墓が著名であるほか、姫原西遺跡からは木棺墓が検出されている。

一方、南側丘陵には山城が多く造られ、大井谷城跡、半分城跡が調査されている。

近世に入ると、松江藩の土地政策により斐伊川の河川改修が実施された。網状河川であった斐伊川は、この改修により一本の大河川に統合され、出雲平野の新田開発が進むことになる。斐伊川西岸には来原岩橋や間府岩橋が開削され、物資輸送や農業用水の確保に利用された。このような松江藩の水利政策は、出雲平野を有数の穀倉地帯とした。

平野中央部の小山遺跡（第2地点）では、近世の豪農成相家の館跡が調査されている。

### **III. 大井谷 I 遺跡**



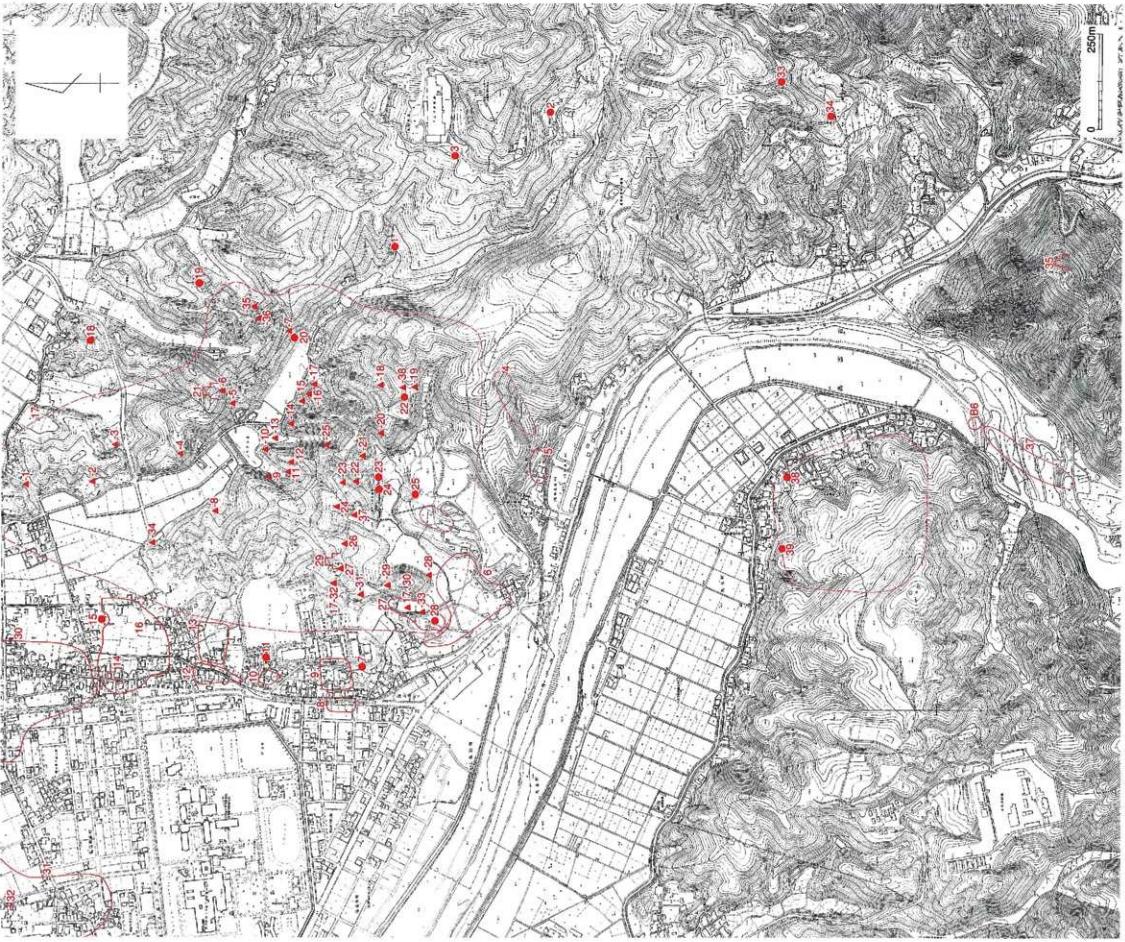
第2図 周辺の遺跡

### 出雲市周辺遺跡分布図

番	地名	番	地名
1	大谷井 I 滝跡	71	比佐賀瀧跡
2	大谷井 II 滝跡	72	古瀧跡
3	利根川源頭跡	73	下谷瀧跡
4	光所寺南遺跡	74	引吉寺參宮付近瀧跡
5	三田谷 I 遺跡	75	下谷天神宮付近瀧跡
6	三田谷 II 遺跡	76	芦瀧跡
7	芦瀧跡	77	芦瀧道跡
8	半分瀧跡	78	古瀧跡
9	半分瀧跡	79	阿彌陀寺西瀧跡
10	山田工業業西遺跡	80	施設寺付近瀧跡
11	施設寺付近瀧跡	81	多賀院北瀧跡
12	施設寺付近瀧跡	82	施設寺西瀧跡
13	青島寺西遺跡	83	施設寺東瀧跡
14	上高瀧跡	84	智瀧跡
15	施設寺官館跡	85	浅谷古瀧
16	上高瀧跡	86	浅谷南古瀧
17	木屋瀧跡	87	開吉寺古瀧
18	木屋瀧跡	88	古瀧内遺跡
19	木屋瀧跡	90	木屋瀧跡
20	神寺寺内廻處	91	五郎寺付近瀧跡
21	神寺寺付近瀧跡	92	美作 I 遺跡
22	天神瀧跡	93	杵井瀧次支坂大墓群
23	高瀧遺跡	94	小野寺寺内墓群
24	佐久井瀧跡	95	星野寺付近大墓群
25	大寺寺古瀧	96	東寺 I 遺跡
26	施設寺五瀧跡	97	施設寺山神穴墓群
27	平瀧九瀧跡	98	山神古瀧
28	大瀧穴墓群	99	山瀧跡
29	下大瀧穴墓群	100	上高瀧跡
30	向山瀧跡	101	上高瀧跡
31	下井戸瀧跡	102	湊谷台場跡
32	下古瀧跡	103	赤坂台場跡
33	古瀧跡	104	雪谷台場跡
34	長瀧御所寺	105	星野寺古瀧跡
35	西谷瀧穴墓	106	越後守殿室跡
36	中山丘陵遺跡	107	鹿島山城跡
37	二子瀧跡	108	栗寺古瀧
38	二子古瀧	109	施設寺北瀧跡
39	靈巖川源頭遺跡	110	施設寺山神跡
40	西谷瀧跡	111	乙井投糞跡
41	東谷岩瀧跡	112	高瀧道跡
42	高瀧穴墓群	113	中月ノ月
43	足利御所寺	114	足利御所寺
44	雄略山古瀧	115	修善免本瀧跡
45	雄略山城穴墓群	116	夷隅古瀧
46	圓岡岩瀧跡	117	西谷古瀧跡
47	鹿島山城跡	118	馬糞古瀧
48	大瀧穴墓群	119	白瀧寺常樂遺跡
49	大寺古瀧	120	谷谷道跡
50	東谷御所跡	121	鏡代古瀧
51	鏡代橋穴墓群	122	大瀧穴墓群
52	鏡代寺	123	高瀧 I 遺跡
53	山神古瀧	124	里八八瀧跡
54	馬太岩瀧跡	125	石古瀧
55	大井間瀧跡	126	古瀧
56	小野寺古瀧	127	前川古瀧
57	井上古瀧跡	128	高瀧 I 遺跡
58	井上橋穴墓群	129	高瀧道跡
59	栗寺川源頭跡	130	小瀧古瀧
60	栗寺古瀧	131	高瀧道跡
61	放生山古瀧	132	奥ノ谷瀧跡
62	利根川源頭跡	133	渡瀧道跡
63	大瀧穴墓群	134	肥前國瀧跡
64	古瀧本源頭跡	135	大瀧古瀧
65	田瀧道跡	136	高瀧道跡
66	妙法寺山古瀧	137	豊前國瀧跡
67	妙法寺山古瀧	138	山神川芋川遺跡
68	地蔵堂橋穴墓群	139	高瀧道跡
69	谷田瀧跡	140	行古古瀧
70	源田谷瀧穴墓群	141	行谷 I 遺跡
			萩谷 II 遺跡

1. 大井谷Ⅰ遺跡  
 2. 大井谷Ⅱ遺跡  
 3. 僧若寺北古墳  
 4. 光明寺南遺跡  
 5. 上邊治桑山古墳  
 6. 三田谷遺跡  
 7. 半分古墳  
 8. 雷工業西遺跡  
 9. 半分遺跡  
 10. 沼田遺跡  
 11. 地獄山古墳  
 12. 善昌寺西遺跡  
 13. 善昌寺遺跡  
 14. 煙治判官館  
 15. 上邊治桑山古墳  
 16. 桑山遺跡  
 17. 上邊治櫻穴墓群  
 18. 管沢古墳  
 19. 狐國谷古墳  
 20. 大井谷Ⅰ号墳  
 21. 大井谷城跡  
 22. 三田谷3号墳  
 23. 三田谷5号墳  
 24. 三井谷4号墳  
 25. 三田谷1号墳  
 26. 小坂古墳  
 27. 半分塚跡  
 -1 新1支群  
 -2 新2支群  
 -3 新3支群  
 -4 新4支群  
 -5 新5支群  
 -6 新6支群  
 -7 新7支群  
 -8 新8支群  
 -9 新9支群  
 -10 第10支群  
 -11 新11支群  
 -12 新12支群  
 -13 新13支群  
 -14 新14支群  
 -15 新15支群  
 -16 新16支群  
 -17 新17支群  
 -18 新18支群  
 -19 新19支群  
 -20 新20支群  
 -21 新21支群  
 -22 新22支群  
 -23 新23支群  
 -24 新24支群  
 -25 新25支群  
 -26 第26支群  
 -27 第27支群  
 -28 新28支群  
 -29 第29支群  
 -30 新30支群  
 -31 新31支群  
 -32 新32支群  
 -33 新33支群  
 -34 新34支群  
 -35 新35支群  
 -36 第36支群  
 -37 第37支群  
 -38 第38支群  
 -39 第39支群  
 28. 三田谷2号墳  
 29. 半分城跡  
 30. 宮松遺跡  
 31. 神門寺境内遺跡  
 32. 神門寺境内遺跡  
 33. 大坊經釋  
 34. 大坊古墳  
 35. 姫山城跡  
 36. 黒木岩経跡  
 37. 大井闇遺跡  
 38. 小坂古墳  
 39. 善昌寺古墳群

第3図 塩冶地区周辺の遺跡



### III.大井谷I遺跡

#### 調査の概要（第4図）

大井谷I遺跡は出雲市の南東、大井谷の中間地点から東側に入った丘陵斜面、標高約71m～90m付近に所在している。付近の遺跡としては大井谷、三田谷を中心とし、全国的にも最大規模の横穴墓群として知られている上塙治横穴墓群や中世の山城跡として知られている大井谷城跡などが存在している。

調査に入る前に、東西、南北とも5m間隔のグリッドを設定し、南からA1Gr～A18Gr、B1Gr～B18Gr、C1Gr～C18Grとした。調査面積は東西15m、南北90mの1,350m<sup>2</sup>である。なお、島根県教育委員会の試掘調査により、表土下30cm程度に遺物包含層が確認されていたことから、30cm程度荒掘りした後、遺構プランの検出に留意しながら1Grから順次北側へ調査を進めていった。

#### 層序（第5図）

基本的な層序は、表上の下は上層から橙褐色土、橙色系の砂質土、粘質土が堆積し、その下層は黄褐色・暗黄褐色系の土が堆積して地山である赤褐色土へと達する。しかしながら、調査区が長いため、その堆積は一様ではなく、13Gr以北の谷状地形となっている地点などでは少し異なる様相を呈している箇所もある。また、東側では地山までの堆積土が約20cmであるのに対し、西側では約1mもあり、旧地形は現状よりもかなり西に偏った谷であったことがわかる。

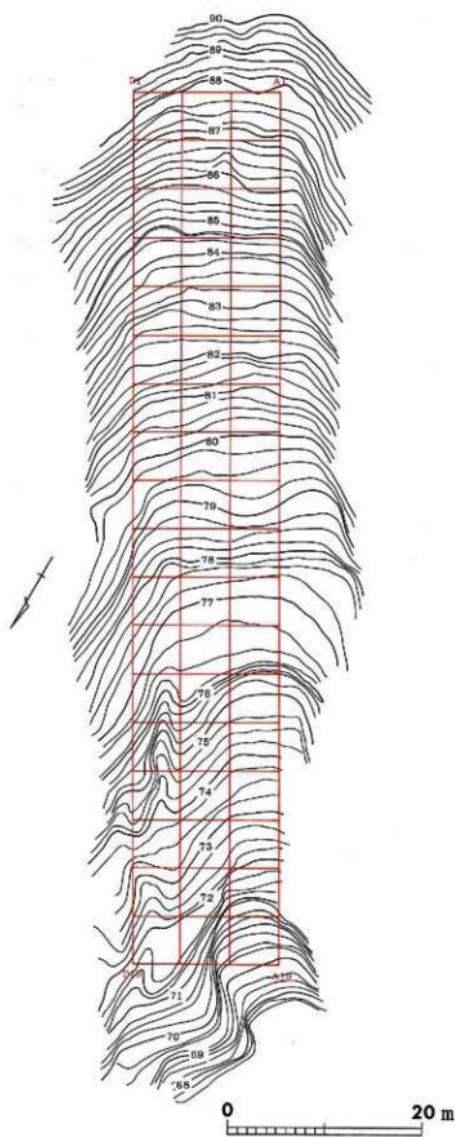
遺構面は、黄褐色系の土が堆積している上面と地山の1層上位にある暗黄褐色土上面の2面があり、遺物包含層は黄褐色系土から地山に至るまでの層位である。

#### 遺構

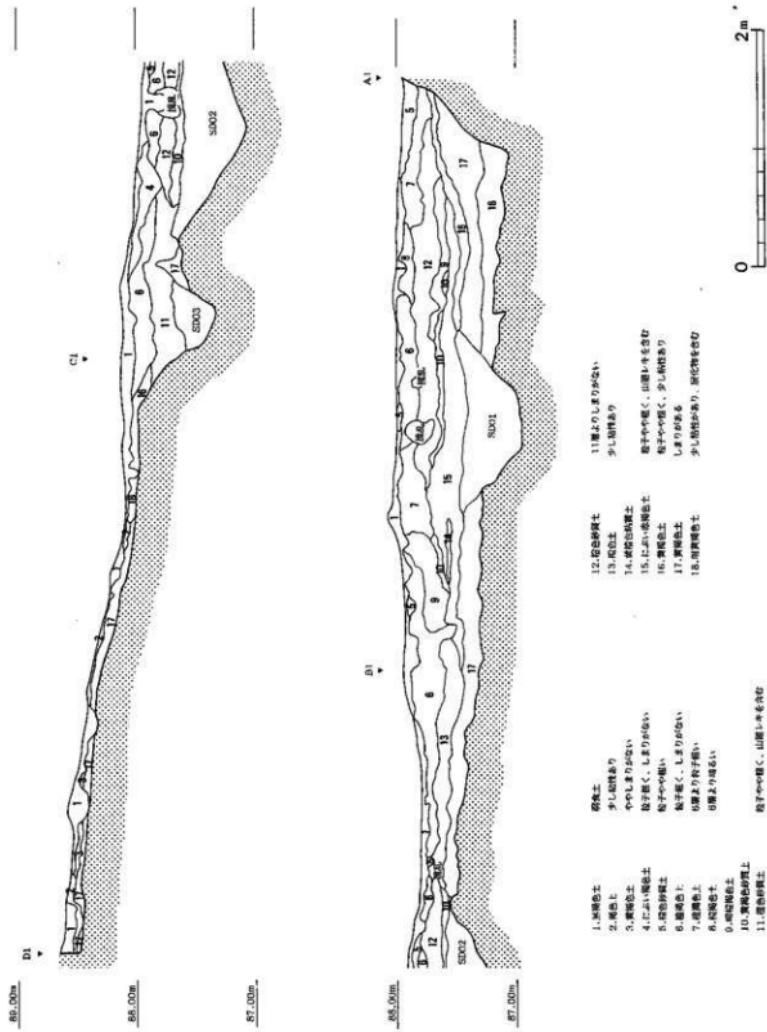
黄褐色系土の上面で溝状遺構13、ピット状遺構4、落込み状遺構7を検出している。

溝状遺構は長いもので45m以上を測り、それぞれの溝が互いに合流・蛇行しながら谷地形に沿うように南北方向に伸びている。ピット状遺構は、径1m～1.3m程度の円形または楕円形を呈するものである。これらの遺構の覆土には橙色系土が堆積しているが、出土遺物が全く認められず、時期的な判断はし難いが、その下層に堆積する黄褐色系土中には12世紀から14世紀頃にかけての遺物が認められることから、少なくともそれ以降、近世の遺構である可能性が強い。

また、地山面より1層上位にある遺構面において、ピット状遺構を16、加工段1を検出している。この中にはP6やP15のように覆土の下層に炭化物を多量に含んでいるものがあり、同じ性格をもつものと考えられる。時期的には、上層の出土遺物から、12世紀～14世紀頃の遺構である可能性が強い。なお、12Gr付近に掘り込まれた加工段も、これらピット群とほぼ同じ時期の遺構と考えられる。



第4図 大井谷I遺跡地形測量図(調査前)



第5図 D1～A1セクション図

## 遺物

土師器、須恵器、磁器、石器などが出土している。いずれも細片で出土量も少ないが、遺構内からは全く出土せず、いずれも黄褐色系土中から出土していることが特徴である。なお、須恵器には東播系須恵器が数点含まれる。また、時期が判断できる遺物には、13世紀頃の土師器播鉢が出土しているほか、13Gr付近から北の谷状落込みでは奈良から平安期にかけての須恵器が数点出土している。

## 遺構と遺物

### 1～3Grにかけての遺構（第8図）

1～3Grにかけては、黄褐色土上面において溝状遺構5、ピット状遺構4、落込み状遺構1、炭化物層を1検出している。以下、それぞれの遺構について記述する。

### SD01（第7図）

調査区を南北に連らぬくように伸びる溝状遺構で、南側は調査区外へと伸び、北側は上部削平のために途中で切れている。検出長約45m、最大幅1.6mを測る。なお、調査地は谷状の丘陵斜面に位置しているため、南側は標高86.35m、北側の切れている地点では標高78.55mであり、6.8mの標高差がある。

また、SD01は途中やや蛇行しながら他の遺構と複雑に合流し、SD01自体も途中で分岐している。すなわち、1～3GrではSD05と合流し、SX01とは切合関係にある。また、4～7GrにかけてはSD07、SD08、SD09と合流し、さらに二つの溝に分岐し、9Grで二つの溝が再び合流して途切れている。

覆土には、遺構の上層に広く堆積する山廻りレキを含む橙色系土が堆積している。この橙色系土は粒子が粗い層と細かい層が瓦層状に堆積しているが、付近の地山にも山廻りレキを多く含んでいることから、洪水や山崩れなどの要因により比較的短期間に堆積したものと考えられ、SD01は一気に埋まった可能性が高い。断面の形状は、南側では両肩からややなだらかに落ち、底面はやや丸く作り出している部分と平坦を作り出している部分がある。また、平坦面を作り出してからさらに底面へと落ちている部分もあり、一様ではない。一方、北側では両肩からやや鋭角に落ちて、底面はやや丸く作り出している。なお、南側での深さは約55cmで北側に向って次第に浅くなる傾向にあり、9Grで途切れている。

遺物は全く出土しておらず、性格については不明であるが、検出面の下層に堆積している黄褐色系土中からは12世紀から14世紀にかけての遺物を多く包含していることから、当該期以降のものと考えられ、近世の遺構である可能性が強い。

### SD02（第7図）

SD01と同様に黄褐色土上面で検出された溝状遺構で、B1GrからB8Grにかけて途中でやや蛇行しながら南北方向に伸びている。北側では上部削平のために途中で切れ、南側は調査区外へと伸びている。検出長は約36m、最大幅1.6mを測り、南側での検出高は標高86.38m、北側の途切れる地点では標高79.86mであり、6.52mの標高差がある。

また、他の遺構と複雑に合流しており、1～3GrではSD05、4～7GrではSD08、SD09、SX03と切合関係にあり、B8Grで途切れている。

覆土にはSD01と同様に山廻りレキを含む橙色系土が粒子が粗い層と細かい層とに互層状に堆積している。断面の形状は、標高の高い南側では両肩からなだらかに落ち、底面はやや丸く作り出しており、深さは約50cmある。一方、北側では両肩から鋭角に落ち、底面はV字状に作り出しており、深さも南側と同様に約50cmほどある。

遺物は全く出土しておらず、性格については不明であるが、堆積土の状況などからSD01と同様に近世の遺構である可能性が強い。

#### SD03

B1Gr～B2Grにかけて検出した溝状遺構で、南北方向に伸びている。検出長約7.6m、最大幅50cmを測る。

覆土には橙色系土が堆積し、断面の形状は両肩から約45度の角度で落ちて底面はほぼ平坦に作り出しており、約20cmの深さがある。遺物は出土しておらず、性格は不明である。

#### SD04

A1Gr～A2Grにかけて検出した溝状遺構で、南南東一北北西へと伸びている。検出長約6.4m、最大幅60cmを測る。

覆土には橙色系土が堆積し、断面の形状は両肩から緩やかに落ち、底面はほぼ平坦に作り出しており、約10cmの深さがある。遺物は出土しておらず、性格は不明である。

#### SD05

A2GrからB3Grにかけて検出した溝状遺構で、南北方向に伸びており、南側ではSD01、北側ではSD02と切合関係にある。検出長約8.2m、最大幅80cmを測る。

覆土には橙色系土が堆積し、断面の形状は両肩から緩やかに落ち、底面はほぼ平坦に作り出しており、約8cmの深さがある。遺物は出土しておらず、性格は不明である。

#### P1

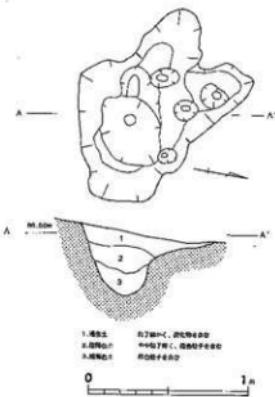
A1Grで検出したピット状遺構であるが、調査区外へと伸びているため、溝状を呈していた可能性もある。

覆土には橙色系土が堆積し、断面の形状は両肩から緩やかに落ち、底面はほぼ平坦に作り出しており、約8cmの深さがある。遺物は出土しておらず、性格は不明である。

#### P2

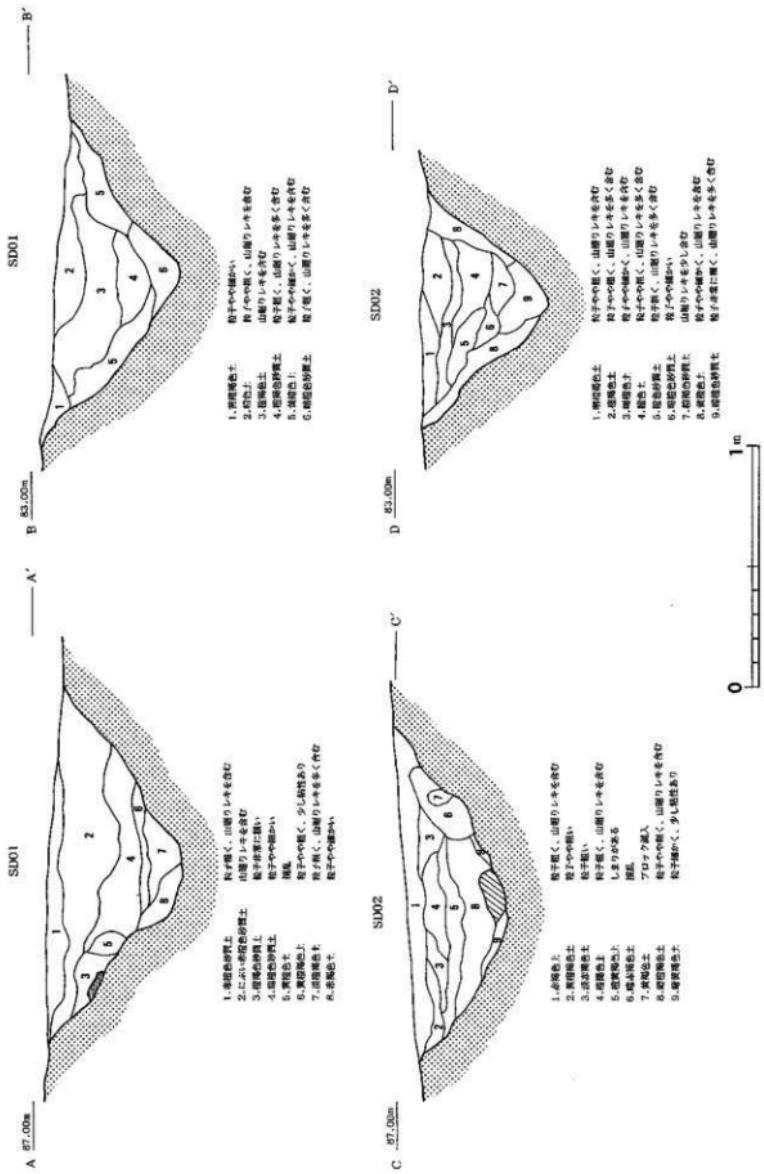
B1Gr～C1Grにかけて検出したピット状遺構である。平面プランは南北長約1.4m、東西長約1.08mを測り、やや南北に長い楕円形を呈する。なお、検出高は標高86.95mである。

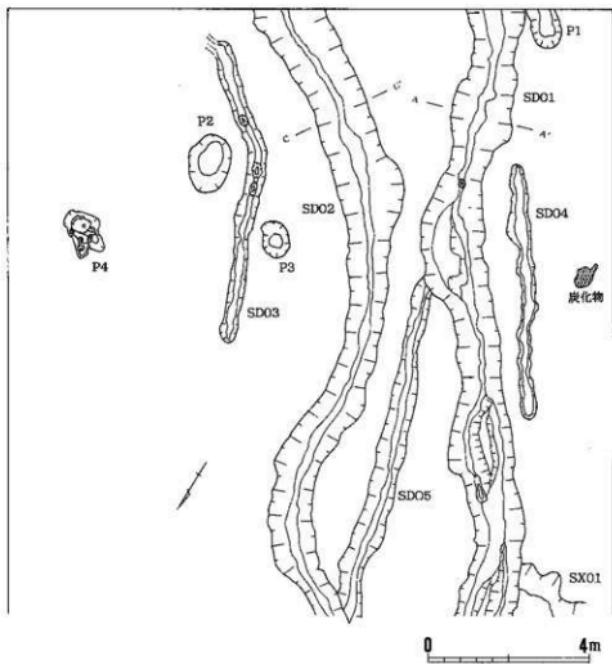
覆土には橙色系土が堆積し、断面の形状は両肩から緩やかに落ちて底面はやや丸く作り出しており、最深部までの深さは約11cmである。遺物は出土しておらず、性格は不明である。



第6図 P4実測図

第7図 SD01・SD02セクション図





第8図 1~3Gr遺構配置図

### P3

B2Grで検出したピット状遺構で、平面プランは南北長約92cm、東西長約68cmを測り、やや南北に長い楕円形を呈する。なお、検出高は標高86.34mである。

覆土には橙色系土が堆積し、断面の形状は両肩から45度の角度で落ちて底面はほぼ平坦に作り出しており、最深部までの深さは約14cmである。遺構内からは拳大の石が若干検出されているが、土器は伴っておらず、性格は不明である。

### P4 (第6図)

C2Grで検出したピット状遺構で、平面プランは南北長約81cm、東西長1.24mを測り、やや東西に長いびつな形状を呈している。なお、検出高は標高86.56mである。

覆土には他の遺構とは異なり、上層から褐色土・橙褐色土・暗褐色土と堆積しており、褐色土中には炭化物が若干認められている。断面の形状は、南側では鋭角に、北側は緩やかに落ちて底面は丸く作り出し、最深部までの深さは約40cmである。遺物は出土しておらず、性格は不明である。

なお、他の遺構とは異なる堆積を示しているが、旧地形の標高が高かったCGrライン上には短期間に堆積したと考えられる橙色系土が堆積しなかったことが要因と考えられる。一様に堆積している黄褐色土上面での検出であることも考慮すれば、1~3Grの他の遺構と同じ時期に築かれたものであろう。

#### 炭化物層

A2Grの黄褐色土上面で検出した炭化物層で、約2cmほどの層厚があり、径30cmほどの間にいびつな形状で広がる。なお、検出高は標高86mである。

性格は不明であるが、何らかの要因で木材を燃やした跡であろう。

#### SX01 (第9図)

A3GrからA4Grにかけて黄褐色土上面で検出した落込み状遺構で、西側は調査区外へと伸び、東側はSD01に切られており、ややいびつな形状を呈している。なお、検出高は標高83.6mである。

覆土には橙色系土が堆積しており、断面の形状は両肩から緩やかに落ち、底面は平坦に作り出し、深さ約5cmを測る。遺物は出土しておらず、性格は不明である。

#### 4~7Grにかけての遺構 (第12図)

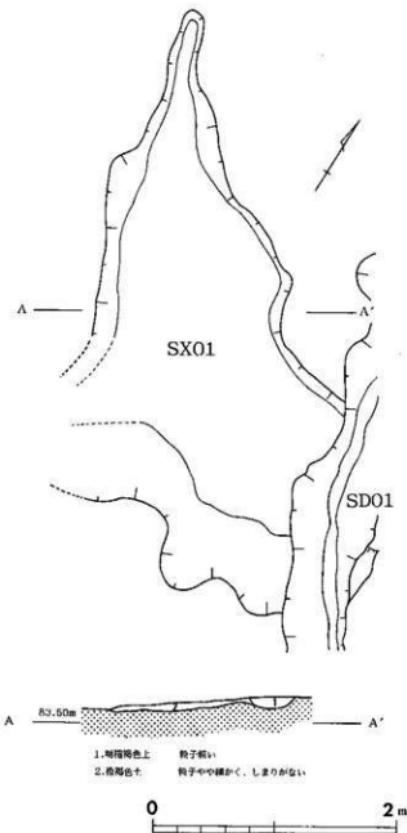
4~7Grにかけては、黄褐色土上面において溝状遺構4、落込み状遺構2(前述した遺構を除く)を検出している。また、地山より1層上位に堆積する暗黄褐色土上面においてピット状遺構を6検出している。

以下、それぞれの遺構について記述する。

#### SD06

B4Grの黄褐色土上面で検出した溝状遺構で、南北方向に伸びている。両端と途中で上部削平により切られているが、本来は同じ溝状遺構であったものと考えられる。検出長約3.8m、最大幅32cmを測る。

覆土には橙黄褐色砂質土が堆積し、断面の形状は両肩から緩やかに落ちて底面は丸く作り出しており、約8cmの深さがある。遺物は出土しておらず、性格は不明である。



第9図 SX01実測図

### SD07

A5Grの黄褐色土上面で検出した溝状遺構で南南東一北北西に伸びている。南側ではSD01、北側ではSD01⑩と合流し、検出長約2.92m、最大幅42cmを測る。

覆土には橙色系土が堆積し、断面の形状は両肩から鋭角に落ちて底面は丸く作り出しており、約20cmの深さがある。遺物は出土しておらず、性格は不明である。

### SD08

B5GrからA6Grにかけての黄褐色土上面で検出した溝状遺構で、南東一北西方向に伸びている。南側ではSD02、北側ではSD01⑩と合流し、検出長約3.84m、最大幅24cmを測る。

覆土には橙色系土が堆積し、断面の形状は両肩からやや鋭角に落ちて底面は丸く作り出しており、約14cmの深さがある。遺物は出土しておらず、性格は不明である。

### SD09

B5GrからA7Grにかけての黄褐色土上面で検出した溝状遺構で、南東一北西方向に伸びている。南側ではSD02、北側ではSD01⑩と合流し、検出長約8.6m、最大幅1.8mを測る。

覆土には橙色系土が堆積し、断面の形状は両肩から緩やかに落ちて底面はほぼ平坦に作り出しており、約10cmの深さがある。遺物は出土しておらず、性格は不明である。

### SX02

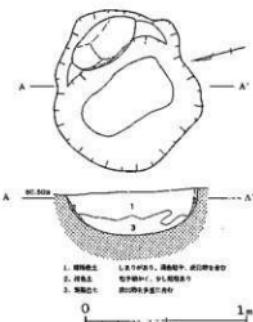
B6Grの黄褐色土上面で検出した落込み状遺構で、検出長約3.4m、最大幅28cmを測る。

覆土には橙色系土が堆積し、断面の形状は両肩から緩やかに落ちて底面はほぼ平坦に作り出しており、約4cmの深さがある。遺物は出土しておらず、性格は不明である。

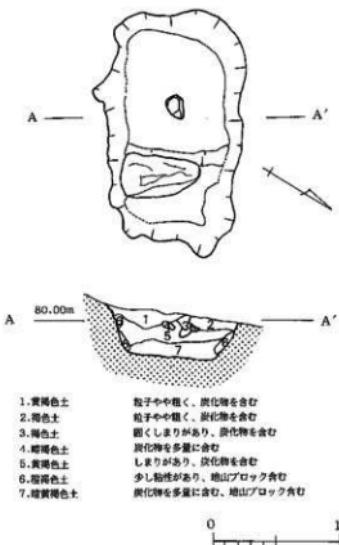
### SX03

B7Grの黄褐色土上面で検出した落込み状遺構で南北方向に伸びている。途中、SD02によって切られているが、検出長約3.6m、最大幅28cmを測る。

覆土には橙色系土が堆積し、断面の形状は両肩から緩やかに落ちて底面はやや丸く作り出しており、約7cmの深さがある。遺物は出土しておらず、性格は不明である。



第10図 P5実測図

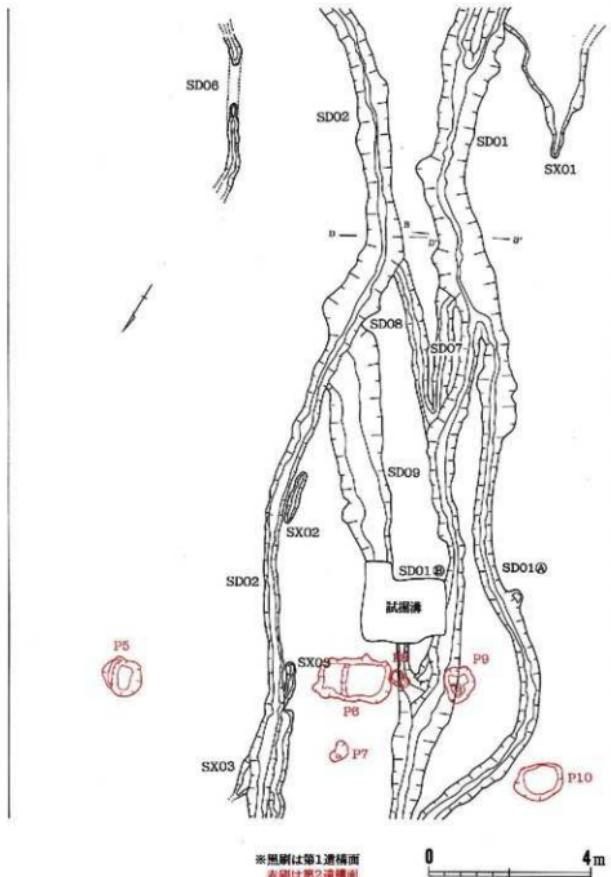


第11図 P6実測図

P5 (第10図)

C7Grの暗黄褐色土上面で検出したピット状遺構で、平面プランは南北長約98cm、東西長約89cmのほぼ円形を呈している。なお、検出高は標高80.56mである。

覆土には炭化物を含む暗褐色土、炭化物を多量に含む黒褐色土が堆積し、壁側には少し粘性のある橙色土が貼られていた。また、東側は一度平坦面を作り出し、中央へと落ちているが、平坦面には焼成痕のある人頭大の石が置かれていたことから、何らかの理由でピット内で木材を燃やした事が明らかである。土器は出土していないが、上層に広く堆積している黄褐色土中からは12世紀～14世紀頃にかけての遺物が多く出土していることから、当該期の遺構である可能性が高い。



第12図 4~7Gr遺構配置図

### P6 (第11図)

B7Grの暗黄褐色土上面で検出したピット状遺構で、平面プランは約1.8m×1.06mの南西一北東に長い隅丸方形を呈している。なお、検出高は標高80.12mである。

覆土には、炭化物を含む黄褐色土や褐色土が堆積し、最下層に堆積している暗黄褐色土には多量の炭化物が認められる。また、P5と同様に壁側には少し粘性のある橙褐色土が貼られ、北東側では一度平坦面を作り出し、焼成痕のある人頭大の石が置かれていた。

P5と同様に土器は出土していないが、ピット内で木材を燃やしたことが明らかであり、12世紀から14世紀頃にかけての遺構である可能性が高い。

### P7・P8・P9・P10

暗黄褐色土上面で検出したピット状遺構には、前述した以外にB7GrでP7・P8、A7GrでP9・P10を検出している。

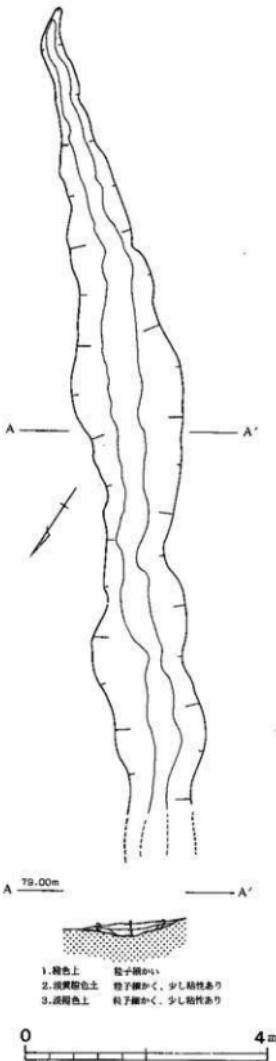
これらの遺構の覆土には、いずれも炭化物が認められていることから、P5やP6と同様に何らかの理由で木材が燃やされたものと考えられる。なお、ピット間には建物跡などの配列は認められず、この丘陵斜面が當時人々が生活をする場であったとは考えにくいことから、例えば護摩供養の跡であったことなどが想定される。時期的にはいずれも12世紀から14世紀頃にかけての遺構と考えられる。

### 8~11Grにかけての遺構 (第15図)

8~11Grにかけては、黄褐色土上面において溝状遺構2、落込み状遺構1（前述した遺構を除く）を検出している。また、地山より1層上位に堆積する暗黄褐色土上面においてピット状遺構2を検出している。以下、それぞれの遺構について記述する。

### SD10 (第13図)

A8GrからA10Grにかけての黄褐色土上面で検出した溝状遺構で、南南西一北北東へと伸びている。北側が上部削平により切れているが、検出長約13.32m、最大幅1.84mを測る。なお、検出高は標高79.75mである。



第13図 SD10実測図

覆土には、粒子の細かい橙色系土が堆積しており、下層には少し粘性のある淡黄褐色土、淡橙色土が堆積している。断面の形状は、両肩から緩やかに落ちて底面はやや丸く作り出しており、約20cmの深さがある。遺物は出土しておらず、性格は不明であるが、前述した黄褐色土上面で検出した遺構と同様に、時期的には14世紀以降に築かれたもので、近世の遺構である可能性が強い。

#### SD11

C10GrからC16Grにかけての黄褐色土上面で検出した溝状遺構で、南南西—北北東へと伸びている。北側が上部削平によって切れているが、検出長約14.4m、最大幅1.12mを測る。なお、南側での検出高は標高77.6m、北側では72.5mであり、5.1mの標高差がある。また、C10Grでは2つの溝（SD11Ⓐ、SD11Ⓑ）がほぼ平行しているが、この2つの溝はC12Grで合流し、さらに北北東へと伸びる。

覆土には橙色系土が堆積し、断面の形状は両肩から緩やかに落ちて底面はやや丸く作り出しており、深いところで約33cmの深さがある。遺物は出土しておらず、性格は不明である。

#### SX04

B9Grの黄褐色土上面で検出した落込み状遺構である。上部削平のために北側が切れているが、溝状を呈していたと考えるとSD11Ⓑと同じ遺構の可能性もある。検出長約1m、最大幅40cmを測る。

覆土には橙色系土が堆積し、断面の形状は両肩から緩やかに落ちて底面はやや丸く作り出しており、深いところで約14cmの深さがある。遺物は出土しておらず、性格は不明である。

#### P11

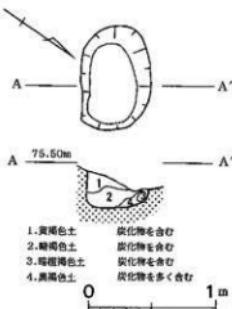
B11GrからA11Grの地山である赤褐色土上面で検出したピット状遺構である。北側は加工段によつて切られているため平面プランは確認できないが、東西長約1.3mを測る。なお、検出高は標高76.1mである。

覆土には炭化物を多く含む褐色土、橙黄褐色土が堆積しており、深いところで約15cmの深さがある。遺物は出土していないが、前述したP5やP6と同様に木材を燃やしたものと考えられ、時期的には、12世紀から14世紀頃にかけての遺構であろう。なお、切合関係により、加工段より古い遺構であることが明らかである。

#### P14（第14図）

A11Grの暗黄褐色土上面で検出したピット状遺構で、平面プランは約54cm×80cmの東西にやや長い楕円形を呈している。なお、検出高は標高75.34mである。

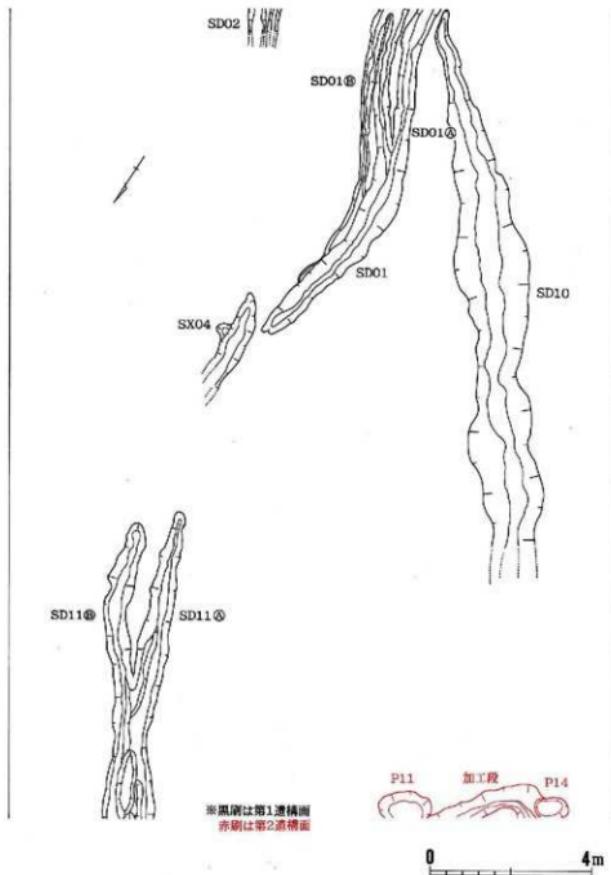
覆土には炭化物を含む黄褐色土や暗褐色土が堆積し、最下層には炭化物を多量に含む黒褐色土が認められている。また、焼成痕のある拳大の石も若干検出されていることから、ピット内で木材を燃やしたことが明らかである。12世紀から14世紀頃にかけての遺構である可能性が強く、切合関係から、P11や加工段が築かれた時期よりも新しい遺構である。



第14図 P14実測図

### 12~15Grにかけての遺構（第19図）

12~15Grにかけては、黄褐色土上面においてピット状遺構8、加工段1（前述した遺構を除く）を検出している。以下、それぞれの遺構について記述する。



第15図 8~11Gr遺構配置図

### P12 (第16図)

A12Grの暗黄褐色土上面で検出したピット状遺構である。平面プランは東西長74cm、南北長42cmを測り、東西に長い楕円形を呈する。なお、検出高は標高75.44mである。

覆土には炭化物を含むにぶい黄色土、赤褐色土が堆積している。断面の形状は、両肩から緩やかに落ちて底面はやや丸く作り出しており、最深部までの深さは約8cmである。

遺物は全く出土していないが、前述したピット群と同様に覆土に炭化物を含む層が堆積していることから、木材を燃やした遺構と考えられ、12世紀から14世紀頃にかけてのものであろう。なお、P12は切合関係より加工段より新しい遺構であることが明らかである。

### P15 (第17図)

B15Grの暗黄褐色土上面で検出したピット状遺構である。平面プランは東西長76cm、南北長86cmのほぼ円形を呈する。なお、検出高は標高75.5mである。

覆土には炭化物を含む暗黄褐色土、暗褐色土、最下層には炭化物を非常に多く含む黒褐色土が堆積している。

遺物は出土していないが、P12などと同様に木材を燃やした遺構と考えられ、時期的には12世紀から14世紀頃にかけてのものであろう。

#### その他のピット群

#### (P13・P16・P17・P18・P19・P20)

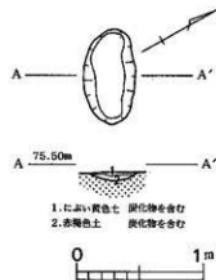
P12とP15の間で小ピットを6検出している。これらのピット状遺構は、いずれも径20cm以下の円形または楕円形を呈するもので、覆土には炭化物を多く含んでいることから、P12やP15と同様に12世紀から14世紀頃にかけて築かれたものであろう。

なお、これらのピット群には建物跡などの配列は認められず、加工段よりも新しい遺構であることが明らかである。

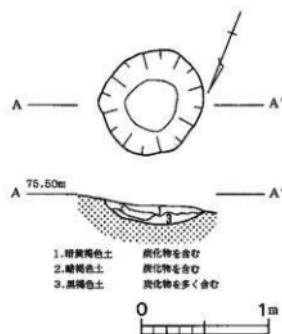
#### 加工段 (第18図)

A11GrからC13Grにかけての暗黄褐色土上面で検出した加工段である。平面プランは、A12Grにおいて上部削平のために切れているが、南南東—北北西に突出して段をもち、「コ」の字状を呈している。東北東—西北西方向に伸びる長軸長は約10mを測り、突出しているCGr側の突出部の長さは約2.2mを測る。なお、検出高は南側で標高76.2mである。

覆土には炭化物を多く含む褐色土、粘性があり炭化物を含む橙黄褐色土が堆積している。断面の形状は標高の高い南側から鋭角に地山を削り出し、約10cmほどの溝を切って北側はほぼ平坦に作り出している。なお、この平坦面はピット群が検出された13Gr付近まで約10mに及んでテラス状に作り出さ



第16図 P12実測図



第17図 P15実測図

れている。

遺物は出土していないが、覆土には炭化物を含んでいることから、暗黄褐色土上面で検出しているピット群との関わりが考えられる。また、切合関係から考えると、P11のように加工段より古い時期に築かれたものとP14のように新しい時期に築かれたものなど、これらピット群にはある程度の時期差が認められている。

これらのピット群が護摩供養などのために築かれたものであるとすれば、この加工段と同時期に築かれたピットがあり、テラス状の加工段で祭祀を行った可能性も指摘できる。

#### 16~18Grにかけての遺構（第20図）

16~18Grにかけては、黄褐色土上面において溝状遺構2、落込み状遺構3（前述した遺構を除く）を検出している。以下、それぞれの遺構について記述する。

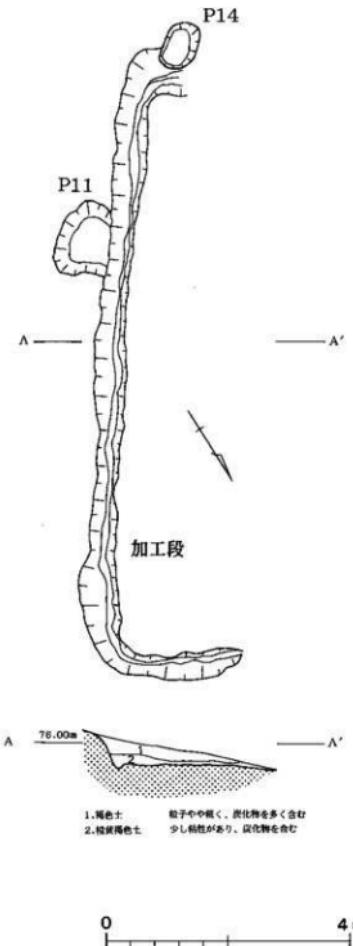
#### SD12

C16Grの黄褐色土上面で検出した溝状遺構で、南東~北西へと伸びている。北側が上部削平により切られているが、検出長約1.0m、最大幅64cmを測る。なお、検出高は南側で標高73.45mである。

覆土には橙色系土が堆積し、断面の形状は両肩から緩やかに落ちて底面はほぼ平坦に作り出しており、深いところで11cmの深さがある。遺物は出土しておらず、性格は不明であるが、黄褐色土上面で検出した他の遺構と同様に近世に築かれたものである可能性が強い。また、SD12は南から伸びているSD11とつながる可能性がある。

#### SD13

C17GrからC18Grにかけての黄褐色土上面で検出した溝状遺構で、南東~北西方向へと伸びている。北側は調査区外へとさらに伸びているが、検出長約7.8m、最大幅1.2mを測る。なお、検出高は南側で標高72.45mである。



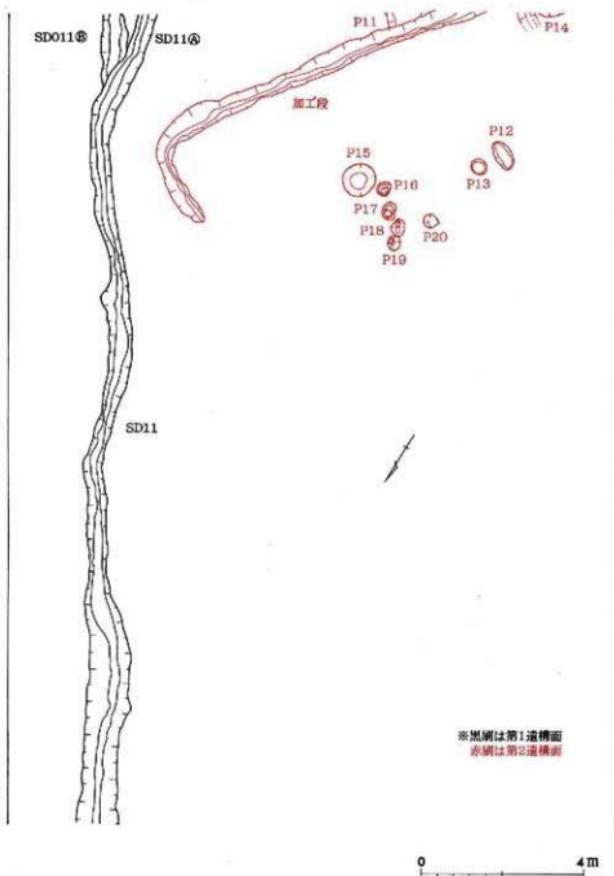
第18図 加工段実測図

覆土には橙色系土が堆積し、断面の形状は両肩から緩やかに落ちて底面はほぼ平坦に作り出されており、深いところで26cmの深さがある。遺物は出土しておらず、性格は不明である。

#### SX05

C16GrからC17Grにかけて検出した落込み状遺構で、長軸長1.36m、短軸長44cmの長円形を呈している。なお、南側での検出高は標高72.24mである。

覆土には橙色系土が堆積しており、断面の形状は両肩から緩やかに落ちて南側で平坦面を作り出しているが、北側ではさらに落ち、最深部までは約24cmの深さがある。遺物は出土しておらず、性格は不明である。



第19図 12~15Gr遺構配置図

## SX06

C18Grで検出した南北方向に基軸をもつ落込み状遺構で、南側は上部削平、北側はSX07によって切られているが、検出長約2.2m、最大幅68cmを測る。なお、南側での検出高は標高71.16mである。

覆土には橙色系土が堆積し、断面の形状は両肩から緩やかに落ちて底面はやや丸く作り出しており、深いところで23cmの深さがある。遺物は出土しておらず、性格は不明であるが、この遺構は本来溝状を呈していた可能性が強い。

## SX07

C18Grで検出した落込み状遺構で、東西方向に基軸をもっている。北側は調査区外へと伸びているため、本来は溝状を呈していた可能性が強いが、検出長約2.8m、最大幅96cmを測る。なお、南側での検出高は標高71.33mである。

覆土には橙色系土が堆積し、断面の形状は両肩から緩やかに落ちて底面はほぼ平坦に作り出しており、深いところで40cmの深さがある。遺物は出土しておらず、性格は不明である。

### 出土遺物（第22図・第23図）

大井谷I遺跡からは多くの遺構を検出しているが、遺構に伴う遺物はピット内の焼成痕のある石を除くと全く出土していないことが特徴である。このことは、谷状地形の斜面であるという立地条件から、人々が當時生活する場とはなりえなかつたことが大きな要因であったと考えられる。しかし、少なからず地山である赤褐色土上面に堆積する黄褐色土、暗黄褐色土中から遺物が出土していることから、これらの遺物は周辺丘陵上の平坦地に生活の場があったものが、二次的に堆積したものと考えられよう。

大井谷I遺跡の北東約40mほどの地点には平坦地が存在しており、このあたりが遺跡の中心となる可能性もあるが、事業地外のため踏査できず、確認できなかつたことは惜しまれる。

出土遺物には土師器、須恵器、磁器、石製品、鉄製品などが出土しているが、このうち土師器が最も多く出土しており、鉄製品については細片のみで形状不明のものがほとんどである。出土遺物分布図（第21図）から、遺物が多く出土しているのは東側のCGr、特に4~10Grにかけてであり、東側のAGr側に向かい減少する傾向にある。また、図示してはいないが、A-B13Grから18Grにかけては旧地形が谷状に急激に落込んでおり、この谷状落込み部からは、奈良、平安期の須恵器が数点出土していることが注意される。

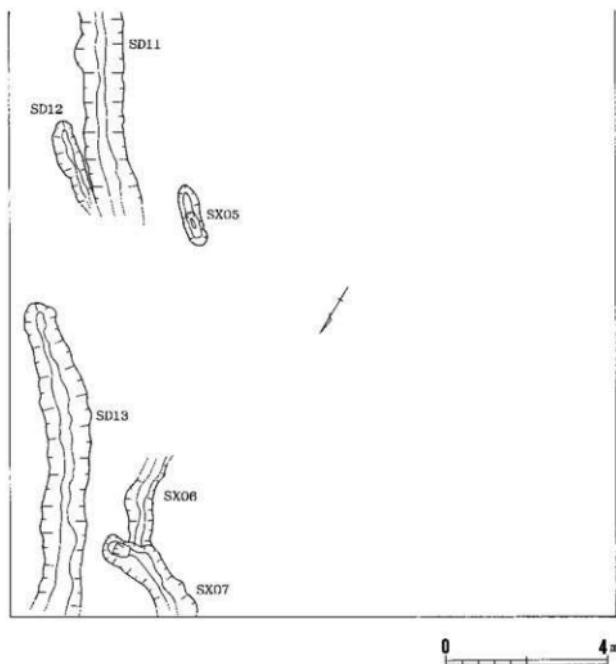
第22図-1~14は、土師器の壊あるいは壊である。完形品がないえ風化が著しく、全体の形状が把握できないものが多い。

1は、内外面は回転ナデ、底部は回転糸切りにより切り離され、外面底部にはススが付着している。2・3は細片であるが、器高が高くなるタイプのものと考えられ、内外面は回転ナデ、底部は回転糸切りによって切り離されている。4は底径が小さいことから小皿である可能性があり、底部は回転糸切りによって切り離されている。5・6はいずれも細片で全体の形状は把握できないが、底部は回転糸切りにより切り離されており、5は外面にススが付着している。7は、底部は回転糸切りによって切り離され、外面底部にススが付着している。8は小皿で、底部から口縁部にかけてやや内湾ぎみに立ち上

がり、口縁端部は先細りとなって丸くおさめている。なお、風化が著しく調整については不明である。9・14はいずれも細片で風化が著しく調整は不明であるが、9・11は外面にススが付着しており、13は内外面にススが付着している。

以上のような壺または小皿のうち、2・3はやや器高が高くなるという特徴をもち、A16Grの谷状落込みからの出土であることを考えると10世紀前後のものである可能性がある。しかしながら、その他の遺物は黄褐色土中からの出土であり、同じ層位から出土した磁器などから、おおよそ12世紀から14世紀頃にかけてのものであろう。

15～20は、土師器鉢、あるいは擂鉢である。15は鉢の口縁部から体部にかけての破片で、内外面はやや粗いナデによって調整され、口縁端部はやや平坦面を意識しているようである。また、端部で口縁部が変形していることから、片口をもつ鉢であろう。16は擂鉢の底部である。外面は粗いナデによって調整され、内面は5本単位のクシ状工具によって擂目が刻まれている。17は擂鉢の体部で、外側はナデによる調整が行われ、内面は縦横に擂目が刻まれている。18も擂鉢の体部であるが、16と同じ間隔の5本単位のクシ状工具によって擂目が刻まれていることから、同一個体である可能性が強いものである。19・20も擂鉢の体部であるが、19は5mm間隔の擂目が縦横に入り、20は2mm間隔の細か



第20図 16～18Gr遺構配置図

い擂目が縦横に入る。なお、19については内外面ともにススが付着している。

以上のような土師器鉢あるいは擂鉢は、その特徴から13世紀から14世紀頃にかけてのものであろう。

第22図-21・22は土師器の壺であろうか。手捏ねで調整され指頭圧痕が至るところに認められている。底部には高台をもち、2ヶ所に穿孔が認められる。焼成も不良なうえ風化が著しいが、調整や胎土から同一個体と考えられる。全体の形状が不明なため、時期的判断は難しいが、同じ層位から出土した他の遺物から推察すれば、12世紀から14世紀頃のものと考えられる。

23は須恵器壺の体部で、外面は格子状のタタキ、内面はナデによる調整が行われている。24は須恵器鉢である。外面口縁部付近が肥厚し、外面はナデ、内面は斜め方向のハケによる調整が行われている。

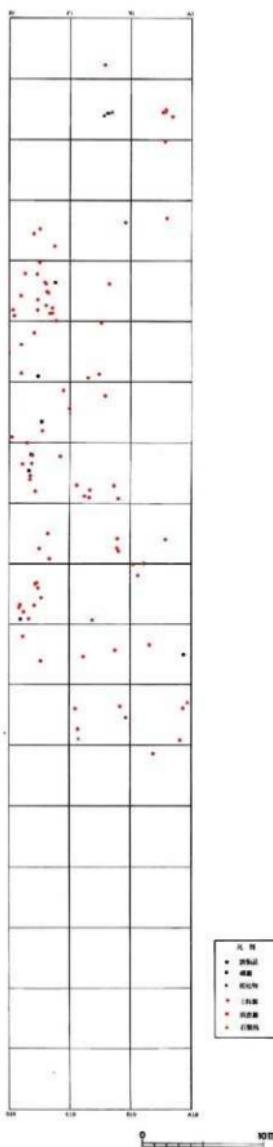
23・24は東播系須恵器の特徴をもち、鎌倉期の遺物であろう。市内では<sup>いわきよしだ</sup>巣丁田遺跡などからも出土している。

25は青磁の碗で、外面体部には間隔の広い縞蓮弁文が施されている。13世紀頃の遺物であろう。

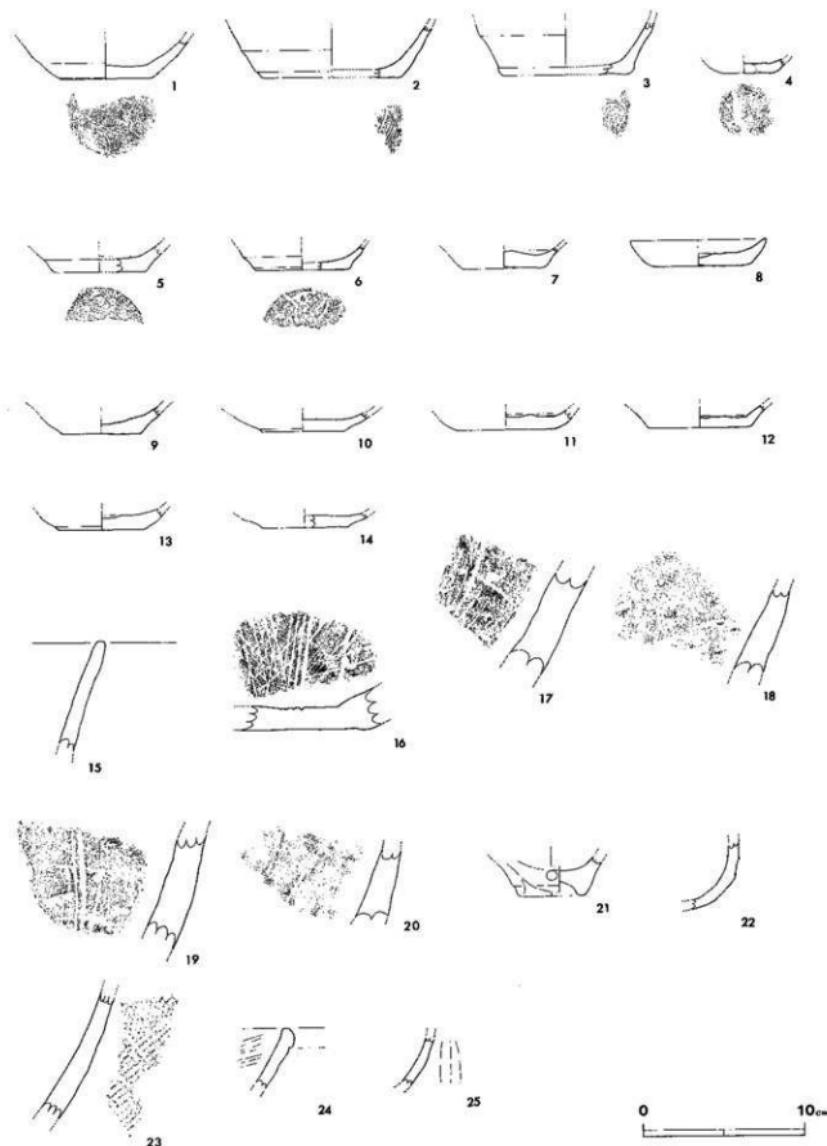
第23図-1~3は、須恵器壺あるいは壺の口縁部から体部の破片である。1は、口縁端部はやや外反して内外面ともに回転ナデによる調整が行われ、回転水引き痕が明瞭に残っている。また、器高も高くなるタイプのものである。2も同様の特徴を有しており、同一個体である可能性もある。3は、口縁端部はやや外反して先細りとなって丸くおさめ、内外面とも回転ナデによる調整が行われている。

以上のような特徴をもつ須恵器壺あるいは壺は、おおよそ平安期頃の資料と考えられる。なお、1~3は14Grから15Grにかけての谷状落込み部からの出土である。

4は須恵器壺の底部付近の破片である。内外面ともにやや粗いナデによる調整が行われている。5~9は須恵器壺あるいは壺の底部付近の破片である。このうち、5・9については高台が付くものであるが欠損しているため、時期については不明である。6は無高台で底部が



第21図 出土遺物分布図



第22図 出土遺物実測図 (1)

回転糸切りによって切り離されている。7はほぼ垂直に立ち上がるやや長めの高台をもつのが特徴である。8はやや外傾して伸びる高台をもつものである。

以上のような須恵器壺あるいは塊は、6が奈良期、7・8については奈良から平安期にかけての遺物であろう。

10は、搔器であろうか。片側を薄く刃部状に加工しているが、細かい打ち欠きは認められない。11は砥石である。両端とも欠損しているが、4面とともに使用痕が認められる。12も同様に砥石で、4面とともに使用痕が残っている。厚さは1cm程度と薄くなっているが、かなり使用されたものであろう。

以上のような石器からは時期的判断は難しいが、同じ層位からの出土遺物には12世紀から14世紀頃にかけてのものが多く認められていることから、当該期の遺物であろう。

## 小 結

大井谷Ⅰ遺跡は丘陵斜面に立地しており、人々が當時生活する場とは考えにくい場所にある。しかし、調査の結果、近世期に築かれたと考えられる溝状遺構やピット状遺構、12世紀から14世紀頃にかけて築かれた多くのピット状遺構や加工段を検出することができた。このことは当該地が一時期利用されていたことが窺える資料として貴重な発見であった。

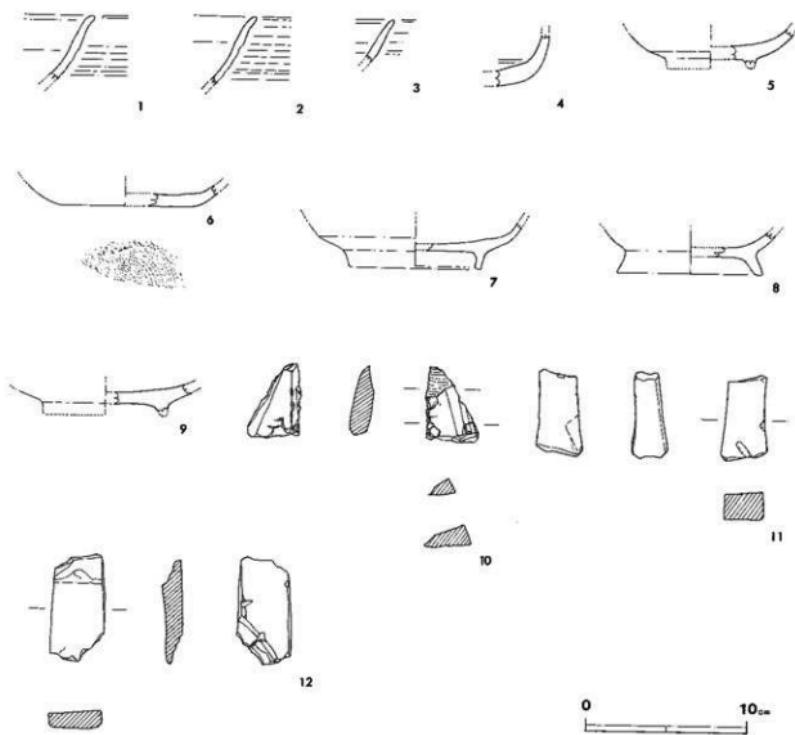
近世期に築かれたと考えられる遺構には、南北方向に伸びる溝状遺構が13検出されているが、遺物が全く出土しておらず、覆土には一気に堆積したと考えられる橙色系土が一様に認められている。標高の高い南方尾根上には、般若寺へと向う旧参道が今も残っており、これに関連する何らかの施設があり、そのために築かれた遺構である可能性も指摘できよう。

12世紀から14世紀頃にかけて築かれた遺構には、ピット状遺構を16、加工段を1検出している。ピット状遺構の覆土には、炭化物を多く含む層が堆積している。また、P5やP6などのように焼成痕の残る石や遺構内の壁側に粘性土を貼り付けているものもあることから、遺構内で木材が燃やされた事が明らかであり、護摩供養などに使用されたものである可能性が指摘できよう。そして、これらピット群には切合関係から築かれた時期にある程度の時期差があったことが明らかであり、加工段の存在は、同時期に築かれたピット状遺構に関連する祭祀を行った場である可能性もある。

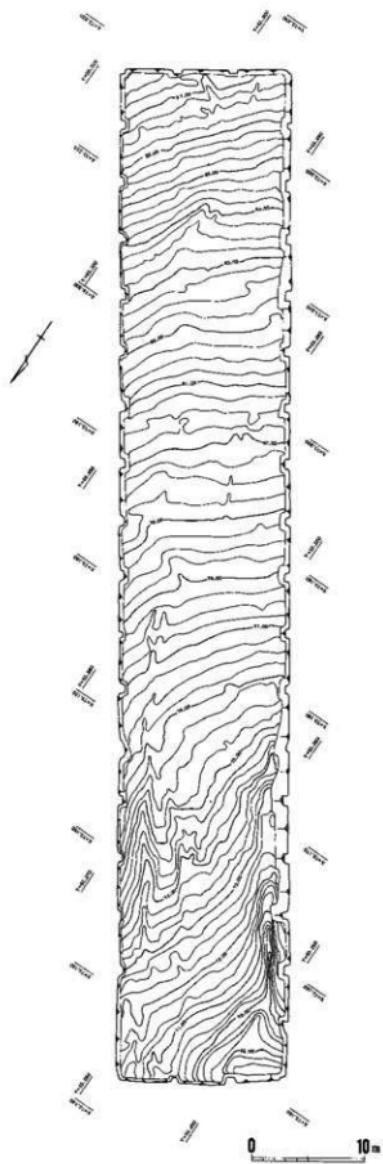
遺物については、いずれも細片で出土量も少ないうえ遺構内からは全く出土していない事が1つの特徴である。また、地山直上に堆積する暗黄褐色土と黄褐色土中が遺物包含層となっているが、出土遺物は調査区の東側で多く検出される傾向にある。時期的には12世紀から14世紀頃にかけての遺物が多く、遺構内からは遺物が全く出土していないことを考えると、これらの遺物は東または北東方面からの二次堆積層であろう。大井谷Ⅰ遺跡の所在する丘陵斜面から北東40mほどの地点には平坦地が存在しており、このあたりが遺跡の中心地であった可能性もある。なお、東播系須恵器が数点検出されていることが注意される。

また、最終的に調査区全体を地山である赤褐色土上面まで掘り下げている（第24図）が、13Grから標高の低い18Grにかけては旧地形が谷状に急激に落込んでいる。この谷状落込み部からは奈良から平安期にかけての須恵器が数点出土している。このことは、当該期の遺跡が付近に存在していたことを窺わせる資料として興味深い。

大井谷Ⅰ遺跡は、人々が當時生活する場ではありえなかった。しかし、造構や遺物の存在から、周辺には少なくとも奈良から平安期、12世紀から14世紀頃、近世の三つの時期に生活の場として利用された遺跡の存在があったことが窺える。今後周辺を調査する機会があれば、遺跡の実態を明らかにし、郷土の財産として後世に伝えていくことが望まれる。



第23図 出土遺物実測図（2）



第24図 大井谷I遺跡地形測量図（調査後）

## 出土遺物観察表(土器)

捕団番号	写真図版	出土地点	種別	法量(cm)	手法の特徴	胎	焼成	色調	備考
22-1	図版5 黄褐色土	C6Gr 土師器 壺or塊	口径 器高 底径	— — 5.5	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ 底部：回転糸切り	密 1mm以下の白色 砂粒・石英を含む	普通	橙褐色	外面ス付着
-2	〃	A16Gr 谷状窪込み	土師器 壺or塊	口径 器高 底径	— — 8.5	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ 底部：回転糸切り	普通 橙色粒子・石英を 含む	淡褐色	
-3	〃	A16Gr 谷状窪込み	土師器 壺or塊	口径 器高 底径	— — 7.7	外面：不明 内面：不明 底部：回転糸切り	密 石英を含む	普通	淡褐色
-4	〃	B12Gr 暗褐色土	土師器 壺or塊	口径 器高 底径	— — 2.6	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ 底部：回転糸切り?	密 石英・雲母を含む	不良	淡橙褐色
-5	〃	A15Gr 谷状窪込み 暗褐色土	土師器 壺or塊	口径 器高 底径	— — 7.6	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ 底部：回転糸切り	密 1mm以下の白色 砂粒・石英を含む	普通	橙褐色
-6	〃	A14Gr 谷状窪込み 暗褐色土	土師器 壺or塊	口径 器高 底径	— — 5.6	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ 底部：回転糸切り	密 石英を含む	普通	黄褐色
-7	〃	B5Gr 黄褐色土	土師器 壺or塊	口径 器高 底径	— — 5.0	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ 底部：回転糸切り	普通 橙色粒子・石英・ 雲母を含む	良好	外／淡褐色 内／淡褐色
-8	〃	A13Gr 谷状窪込み 暗褐色土	土師器 小皿	口径 器高 底径	8.4 1.6 6.0	風化著しく不明	やや粗い 1mm大の砂粒・ 石英・雲母を含む	不良	橙褐色
-9	〃	A14Gr 谷状窪込み 暗褐色土	土師器 壺or塊	口径 器高 底径	— — 4.8	風化著しく不明	普通 1mm大の砂粒・石英 ・雲母・金雲母を含む	普通	淡褐色
-10	〃	C6~C7 SEC	土師器 壺or塊	口径 器高 底径	— — 5.0	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ 底部：回転糸切り	密 1mm以下の白色 砂粒・石英を含む	普通	橙褐色
-11	〃	B6~C6 SEC 黄褐色土	土師器 壺or塊	口径 器高 底径	— — 6.0	風化著しく不明	密 1mm大の砂粒・ 石英・雲母を含む	普通	橙褐色
-12	〃	A3~B3 SEC 黄褐色土	土師器 壺or塊	口径 器高 底径	— — 6.2	風化著しく不明	密 1mm以下の白色 砂粒・石英を含む	普通	橙褐色
-13	〃	A9Gr 黄褐色土	土師器 壺or塊	口径 器高 底径	— — 5.3	風化著しく不明	密 1mm大の砂粒・ 石英・雲母を含む	普通	淡橙褐色

## 出土遺物観察表(土器)

掲図番号	写真図版	出土地点	種別	法量(cm)	手法の特徴	胎 土	焼成	色 調	備 考
22-14	図版5	B8Gr 黄褐色土	土師器 壺or塊	口径 — 器高 — 底径 5.3	風化著しく不明	密 1mm以下の白色砂粒・ 石英・雲母を含む	普通	外／褐色 内／赤褐色	
-15	"	C6Gr 黄褐色土	土師器 鉢	口径 — 器高 — 底径 —	外面：ナデ 内面：ナデ	密 1mm大の砂粒・ 石英・雲母を含む	普通	淡橙褐色	片口部
-16	"	C11Gr 黄褐色土	土師器 擂鉢	口径 — 器高 — 底径 —	外面：ナデ 内面：ナデ、擂目	密 1mm大の砂粒・ 石英・雲母を含む	普通	淡褐色	内面に5本単位 の擂目あり
-17	"	東側溝	土師器 擂鉢	口径 — 器高 — 底径 —	外面：ナデ 内面：ナデ、擂目	密 1mm以下の白色砂粒・ 石英・雲母を含む	普通	淡褐色	
-18	"	西側溝	土師器 擂鉢	口径 — 器高 — 底径 —	外面：ナデ 内面：ナデ、擂目	密 1mm以下の白色砂粒・ 石英・雲母を含む	普通	淡褐色	
-19	"	A13Gr 谷状落込み 暗褐色土	土師器 擂鉢	口径 — 器高 — 底径 —	外面：ナデ 内面：ナデ、擂目	密 1mm以下の白色砂粒・ 石英・雲母を含む	普通	淡褐色	内外面スス付着
-20	"	C8Gr 黄褐色土	土師器 擂鉢	口径 — 器高 — 底径 —	外面：ナデ 内面：ナデ、擂目	密 石英・雲母を含む	普通	橙褐色	
-21	"	C8～C9 SEC	土師器 壺?	口径 — 器高 — 底径 3.8	外面：手捏ね 内面：手捏ね	やや粗い 3mm大の砂粒を 多く含む	不良	橙褐色	22-22と 同一個体
-22	"	C8～C9 SEC	土師器 壺?	口径 — 器高 — 底径 —	外面：手捏ね 内面：手捏ね	やや粗い 3mm大の砂粒を 多く含む	不良	橙褐色	22-21と 同一個体
-23	図版6	A4Gr 黄褐色土	須恵器 壺?	口径 — 器高 — 底径 —	外面：格子状タタキ 内面：ナデ	密	良好	淡灰色	東播系須恵器
-24	"	C8Gr 黄褐色土	須恵器 鉢	口径 — 器高 — 底径 —	外面：ナデ 内面：ナデ、 斜め方向ハケ	やや粗い 1mm以下の白色砂粒・ 石英・雲母を含む	不良	淡灰色	東播系須恵器 口縁端部が 肥厚する
-25	"	B4Gr 黄褐色土	青磁 碗	口径 — 器高 — 底径 —	外面：ナデ 内面：ナデ	密	良好	淡綠灰色	外面に織差弁文
23-1	図版5	A15Gr 谷状落込み	須恵器 壺or塊	口径 — 器高 — 底径 —	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	淡灰色	回転水引き 痕明瞭に残る

## 出土遺物観察表(土器)

標図番号	写真図版	出土地点	種別	法量(cm)	手法の特徴	胎 土	焼成	色 調	備 考
23-2	図版5	A14Gr 谷状窪込み 黄褐色土	須恵器 壺or塊	口径 - 器高 - 底径 -	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	淡灰色	回転水引き 痕明瞭に残る
-3	〃	表探	須恵器 壺or塊	口径 - 器高 - 底径 -	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ	密	良好	外／黒色 内／淡灰色	回転水引き 痕明瞭に残る
-4	〃	B17Gr 谷状窪込み 黄褐色土上	須恵器 壺	口径 - 器高 - 底径 -	外面：ナデ 内面：ナデ	密 1mm以下の白色 砂粒を含む	良好	灰色	
-5	〃	B17Gr 谷状窪込み 黄褐色土	須恵器 高台付 壺or塊	口径 - 器高 - 底径 -	外面：ナデ 内面：ナデ	密 1mm以下の白色 砂粒を含む	良好	淡灰色	
-6	〃	A18Gr 谷状窪込み 黄褐色土	須恵器 壺or塊	口径 - 器高 - 底径 7.8	外面：回転ナデ 内面：回転ナデ 底部：回転糸切り	密 1mm以下の白色 砂粒を含む	普通	外／暗灰色 内／灰色	
-7	〃	C8Gr 黄褐色土	須恵器 高台付 壺or塊	口径 - 器高 - 底径 8.2	外面：ナデ 内面：ナデ 底部：糸切り後、ナデ	密	良好	灰色	
-8	〃	A16Gr 谷状窪込み	須恵器 高台付 壺or塊	口径 - 器高 - 底径 8.9	外面：ナデ 内面：ナデ 底部：糸切り後、ナデ	やや粗い	普通	灰色	
-9	〃	B15Gr 黄褐色土上	須恵器 高台付 壺or塊	口径 - 器高 - 底径 -	外面：ナデ 内面：ナデ 底部：糸切り後、ナデ	やや粗い 1mm以下の砂粒を 含む	やや不良	綠灰色	

## 出土遺物観察表(その他の遺物)

標図番号	写真図版	出土地点	種別	法量(cm)	備 考
23-10	図版6	B10Gr 黄褐色土上	搔器	最大長 4.4 最大幅 3.2	片側を薄く打ちかいて刃部状にしている
-11	〃	A15~B15 SEC	砥石	最大長 4.7 最大幅 2.8	両端欠損している 4面とも使用痕あり
-12	〃	A12Gr 黄褐色土上	砥石	最大長 6.2 最大幅 3.3	両端欠損している 4面とも使用痕あり

**大井谷 I 遺跡**  
**図 版**



大井谷Ⅰ遺跡周辺空中写真



加工段付近空中写真

図版2



遺構完掘状況（南から）



遺構完掘状況（6・7Gr付近）



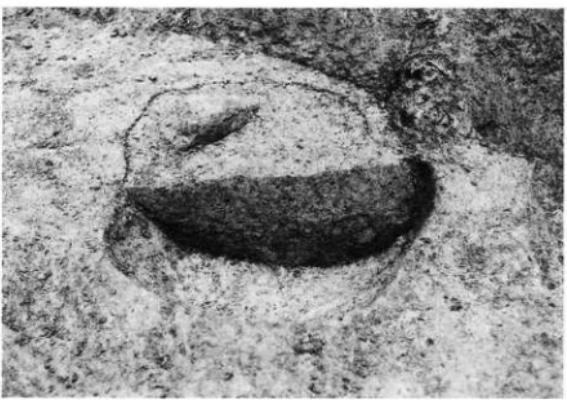
B1～A1堆積土状況



SD02 土層断面

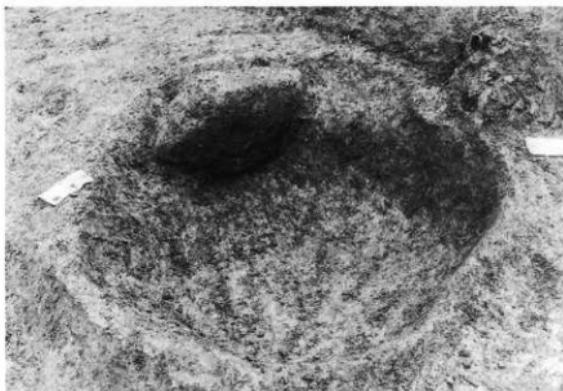


炭化物検出状況



P5 土層断面

図版4



P5 完掘状況



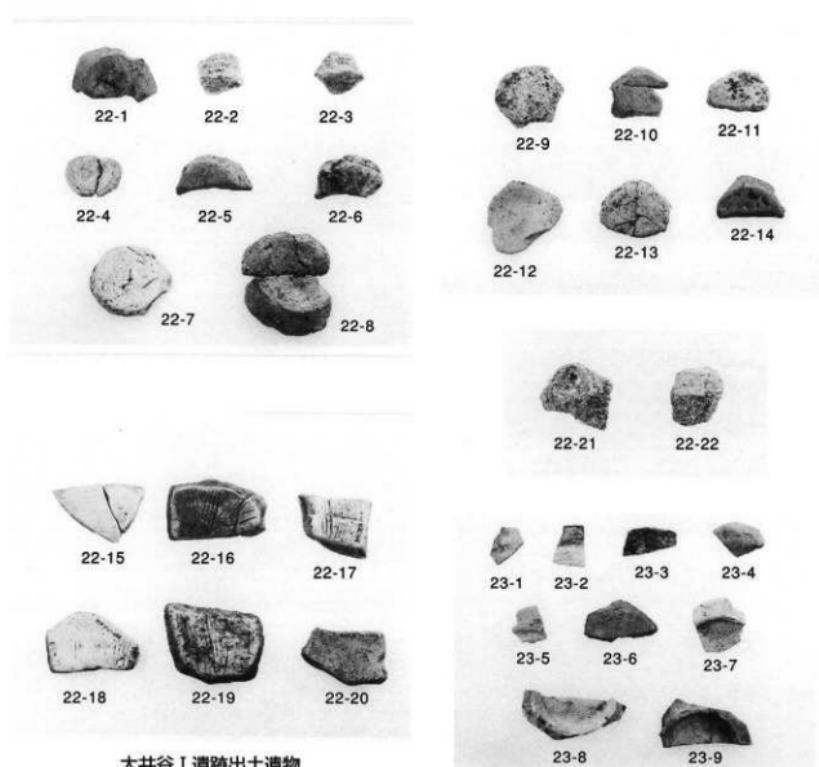
P6 検出状況



P6 土層断面

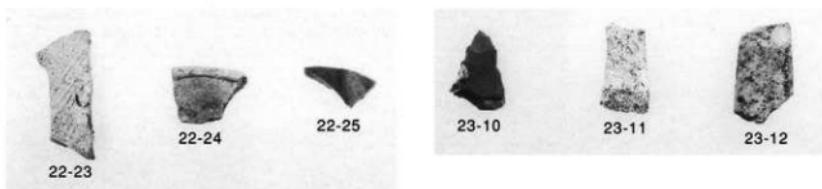


加工段検出状況  
(西から)



大井谷Ⅰ遺跡出土遺物

図版6



大井谷Ⅰ遺跡出土遺物

## **IV.大井谷Ⅱ遺跡**

## IV. 大井谷Ⅱ遺跡

### 1. 試掘調査の概要

平成10年（1998）3月、建設省（現：国土交通省）出雲工事事務所より斐伊川放水路事業予定地内の残土処理場における埋蔵文化財の有無について照会を受けた。当該地は周知の遺跡とはなっていないが、大井谷には上塙治横穴墓群や石切場跡、大井谷Ⅰ遺跡などが存在していることから、トレンチによる試掘調査を実施することとした。

試掘調査は平成10年（1998）4月から5月にかけて計20ヶ所のトレンチを設定して行った。その結果、事業予定地のほぼ中央にあたる谷状地形に設定したトレンチから、土師器や須恵器、陶器などが出土した。また、谷状地形から一段高くなっている平坦地に設定したトレンチからも一部遺物が出土し、計9ヶ所のトレンチから遺物が出土した。（第25図参照）

以下、遺物が出土した主なトレンチについて記述する。

#### 第9トレンチ

現状は水田であり、表上から約1mほど掘削した黒褐色粘質土・黒色粘質土中に遺物を多く包含している。

遺物には土師器壺、擂鉢のほか、常滑系陶器などがある。なお、黒褐色粘質土・黒色粘質土は暗オーリーブ色粘質土を基盤とした遺構と考えられた。なお、このトレンチは発掘調査ではA区平坦面の東側にあたる。

#### 第11トレンチ

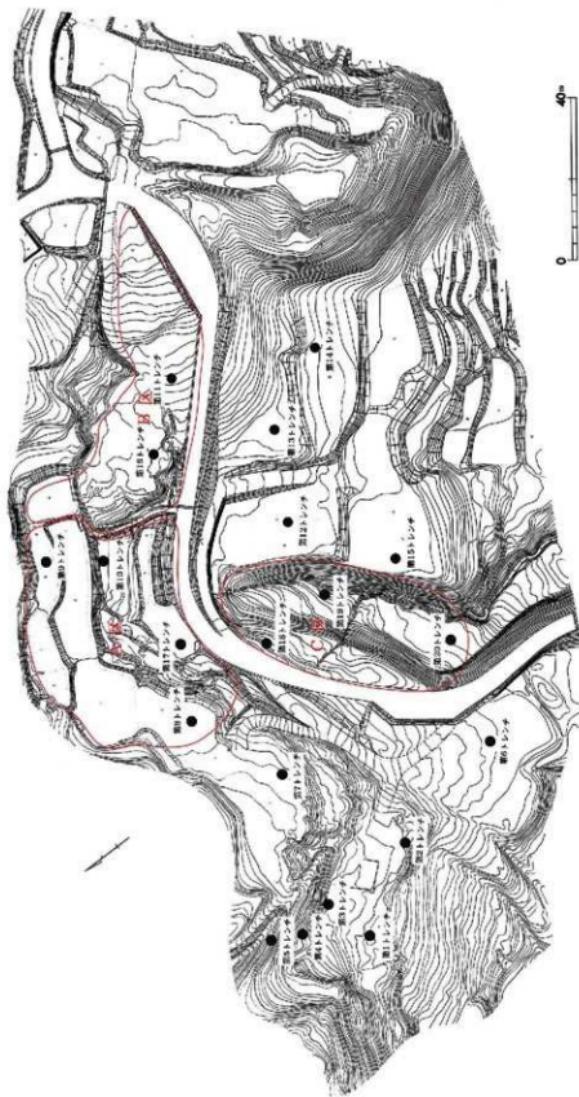
現状は荒蕪地であり、表下約50cmほど下層に堆積する褐色粘質土が遺物包含層となっており、土師器や東播系須恵器が出土している。なお、褐色粘質土の下層に堆積する暗褐色粘質土は、遺構である可能性もあると考えられた。発掘調査ではB区のほぼ中央にあたる。

#### 第20トレンチ

現状は谷沿いの荒蕪地で、以前は水田であったようである。表土下約50cm～1.5m付近までの層位が遺物包含層で、土師器、須恵器、陶器擂鉢などが出土している。なお、明確な遺構は検出されず、地形から考えても二次堆積によって遺物が流されたものである可能性が強いものであった。発掘調査ではC区にあたる。

試掘調査の結果から、事業者である建設省出雲工事事務所と出雲市教育委員会で協議を重ね、約7,500m<sup>2</sup>について発掘調査をすることで合意した。そして、平成11年（1999）から調査を開始することを確認している。また、発掘調査地は広大であるため、便宜上、道路や段差で区分し、それぞれA区、B区、C区の3区に分けて調査を実施している。以下、それぞれの調査区について調査結果を報告する。

第25図 試掘トレーンチ位置図

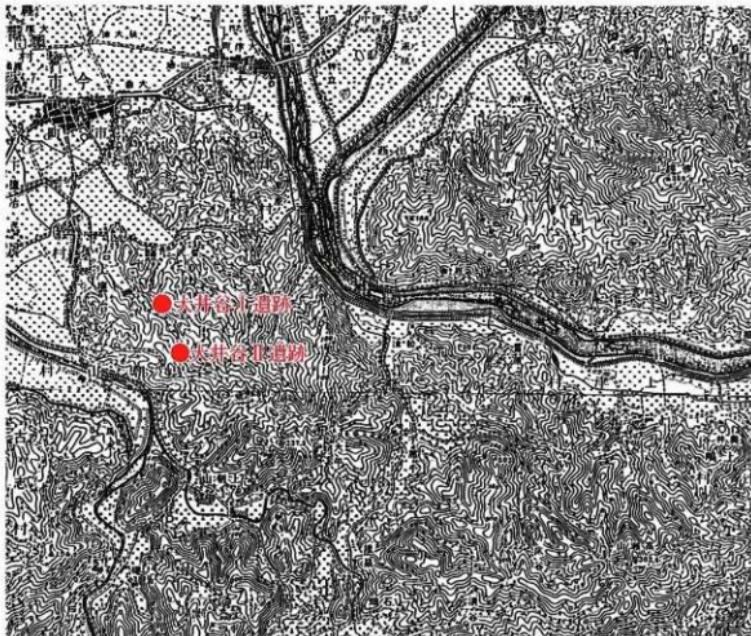


## 2. A区の調査

### 調査の概要

調査区は出雲市上塩治町大井谷の谷奥に位置し、調査区の北側には天応元辛酉（781）年草創と伝えられる般若寺（浄土宗）が所在する。また付近には大井谷Ⅰ遺跡や般若寺北古墳も確認されており、古くから人の出入りがあったことが推定された。

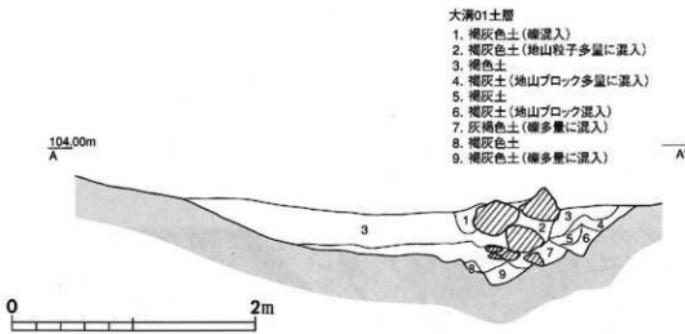
調査の結果、遺跡は人為的に盛土・切土された平坦地の上に構築されており、掘立柱建物跡・池状遺構・石段遺構・中世墳墓などが確認されている。出土遺物は古代から近世に至るまで出土しており、7～9世紀（第1興隆期、寺院関連）、13～15世紀（第2興隆期、寺院関連）、17～19世紀（第3興隆期、民家関連）の3つの興隆期が確認された。このうち第2興隆期が遺跡の最盛期で、出土遺物は多量の土師質土器のほか、白磁、青白磁、青磁、常滑系陶器、備前、龜山系、古瀬戸、瓦質土器、漆器、鉄製品、銅飾、石臼、魚骨などが出土している。器種構成は遺物の大部分を土師小皿が占めるが、燭台、香炉、花瓶の「具足」が全て確認されたほか、奈良火鉢、製鉄関連遺物なども確認されている。



第26図 大井谷II遺跡位置図（明治32年帝国陸軍測図5万分の1）

### 大溝O1（第27図）

縦長約8.0m、横幅約4.0m、深さ約0.7mで、壁面の立ち上がりは、西側がなだらかに内湾しながら立ち上がる反面、東側は若干いびつなものの、ほぼ直線的に立ち上がる。床面は平坦地を呈するが、その最低部はやや東よりに位置している。埋没時期は、埋土から近世以降の陶磁器が出土することから、近世以降と推定される。調査区からは4つの大溝を確認しているが、その中で最も新しい大溝である。



第27図 大溝O1土層断面図

### 大溝O2（第29図）

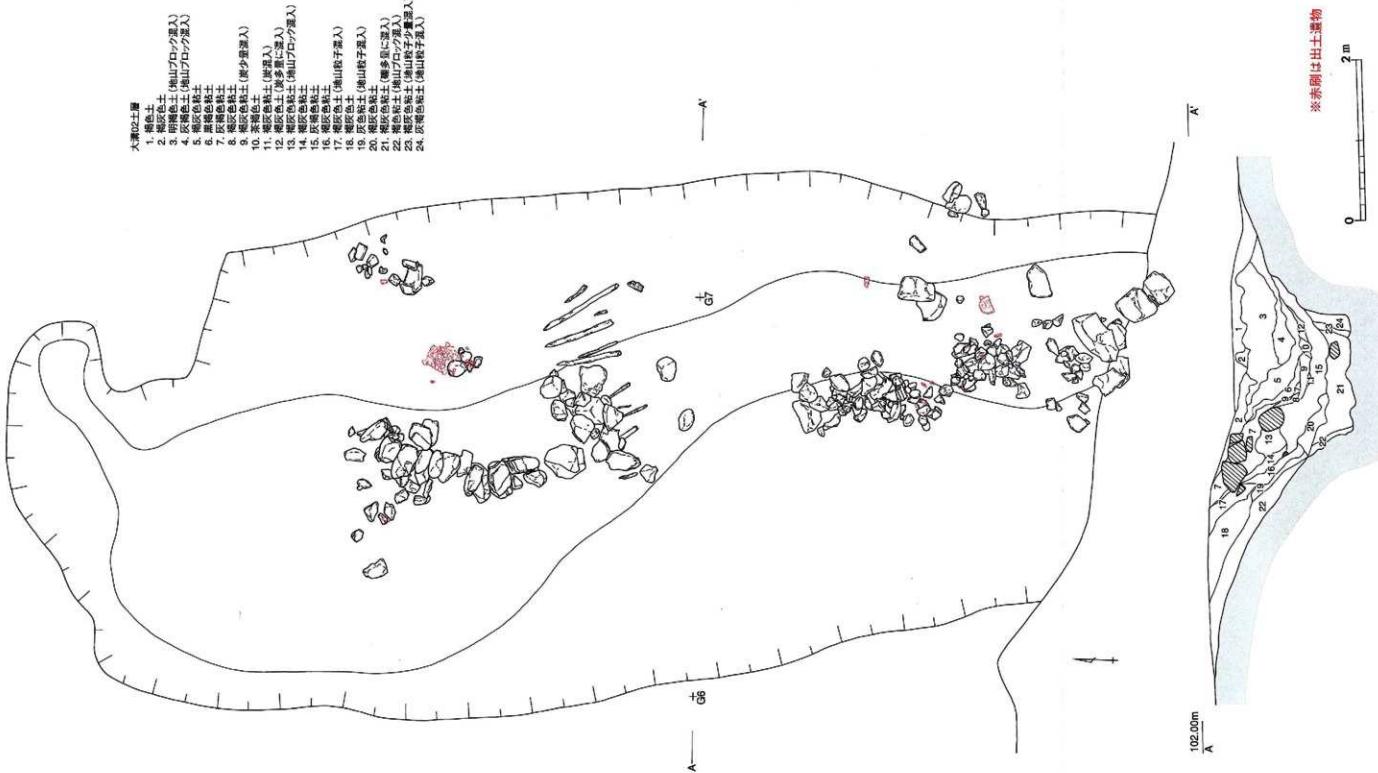
縦長14.5m以上、横幅7.0m、深さ約1.5mで、壁面の立ち上がりは西側が外反するように立ち上がるのに対し、東側は外反するものの西側よりも急勾配で立ち上がり、外側にいびつに伸びた後、さらに外側に屈曲して直線的に伸びる。床面は大溝の中心からやや東に位置し、底面は平坦状を呈す。溝内からは数本の木杭が倒れた状態で確認されたが、これらは並んでいたと考えられることから、大溝O2には何らかの施設が施されていた可能性がある。出土遺物には須恵器、土師小皿、瀬戸、銅製鍋、鉄製品などがあるが、最終的な埋没時期は15世紀頃と推定される。

### 大溝O2出土遺物（第30～32図）

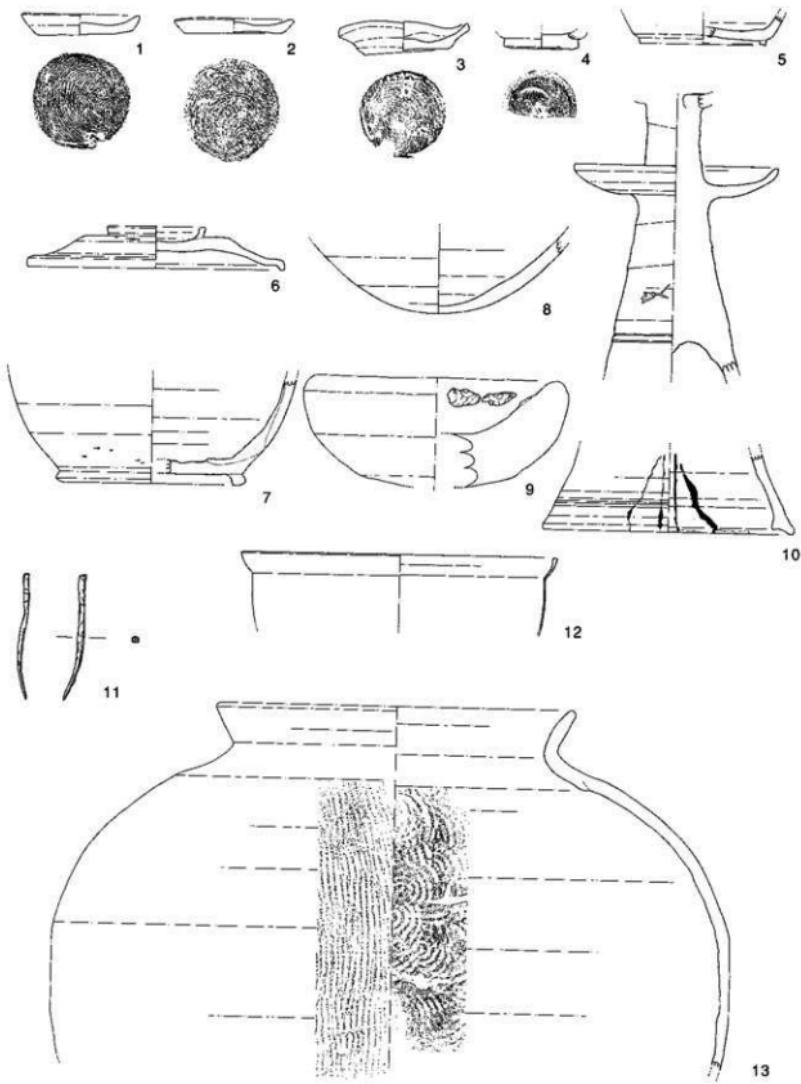
第30図1～3は土師質土器である。1、2は底径口径差の小さいタイプで、1は内外面に回転ナデ調整を施し、底部は回転糸切で切り離している。口縁部の立ち上がりはやや内湾し、端部は尖り気味に仕上げている。2は風化のため内面見込の調整は不明であるが、回転ナデ調整、底部回転糸切により仕上げている。口縁部の立ち上がりは外方に直線的に伸び、端部に平坦面を作っている。3は内外面に回転ナデを施し、底部は回転糸切で切り離している。口縁部は外方に直線的に立ち上がり、中間部で細くなった後、端部で平坦面を作り肥厚する。先端部は尖り気味である。4は中国製天目茶碗で、底部は削り出し高台である。胎土は緻密で、内面を施釉している。5～8は須恵器である。5は須恵器壺で、風化のため底部の調整は不明で、貼付高台を施す。内外面は回転ナデで調整し、口縁部は外方に



第28図 遺構全体図（調査終了後全体）

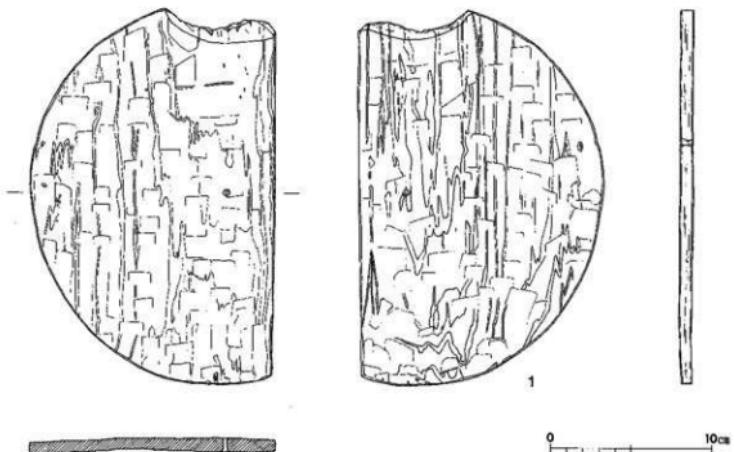


第29図 大溝02遺構図



第30図 大溝02出土遺物 (1)

直線的に立ち上がる。6は蓋で内外面ともに回転ナデで調整し、天井部は回転ヘラの後、輪状つまみを施し回転ナデで調整している。口縁部はやや外方に屈曲し端部を丸く仕上げている。7は壺類の底部で、粘土を積み上げ付け高台を施した後、ナデ上げている。底部外面はヘラ削りを施す。8は鉄鉢形須恵器の底部で、放物線を描くように立ち上がる。内外面回転ナデ調整で、内面底部にはナデを施す。9はとりべで、内外面ともにナデ調整を施し、内面には金属滓が付着する。口縁部は内湾しながら立ち上がり、端部を丸く仕上げている。村上隆氏の分析の結果、金属滓は銅滓であることが確認された。10は瀬戸の燭台で、京都以西で3例目の出土である。体部は受皿下に段を持たず、脚端部内面にかえりを施すタイプで、藤澤良祐氏の古瀬戸後期II期に属する遺物である。脚部の断面には漆が残り、漆接により補修している。脚部内面は回転ナデ調整を施しているが、底板が中央に勝ができるほどナデ上げられている。一方、体部外面には2条の沈線を施すが、小石が混入し粗い作りである。灯蓋は欠損しているが、受皿は内湾気味に立ち上がった後、やや内側に屈曲し外方に伸びる。口縁端部は尖り気味に仕上げている。天井部は灯蓋が欠損していたが、差込孔は残存していた。11は鉄釘で、やや細いタイプのものである。叩部は体部より直線的に伸びる。灯蓋の内鉄芯の可能性もある。12は

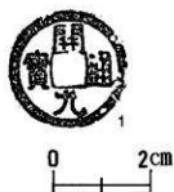


第31図 大溝02出土遺物(2)

銅製鍋で、口縁部は内湾しながら立ち上がった後、内側に段を作り再び内湾する。13は須恵器壺である。外面に平行タタキ、内面に青海波文を施す。内面頸部下に粘土の接合痕が残る。

第31図1は曲物の底板で、板目の板を加工している。側板との接合用に2か所の穴を穿っているほか、中央部にも1か所の穴を穿っている。一部炭化している。

第32図1は開元通寶で、背面に文字・記号は残っていない。



第32図 大溝02出土古錢

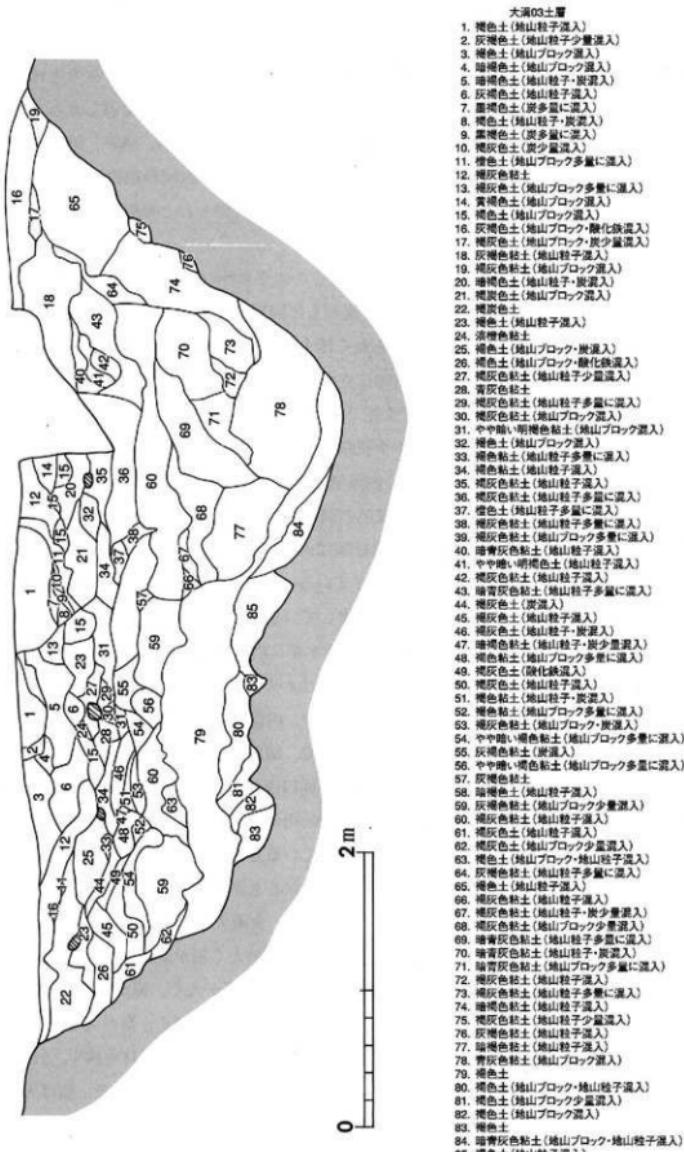
### 大溝03 (第33図)

縦長30m以上、横幅8.0m、深さ2.4m以上で、現道を挟んでC区の谷の上流に当たる。壁面の立ち上がりは西側で外方に直線的に立ち上がるのに対し、東側は西側よりも急勾配で立ち上がり、外反気味に立ち上がる。床面は大溝の中心から西側に平坦面を作り、最深部は東に位置し丸みを帯びる。出土遺物には須恵器、土師器、丹塗土師器、土師質土器、白磁、青磁、備前、瀬戸、銅製品、鉄製品などがあるが、16世紀以降の遺物は出土しなかった。下層からは7~9世紀の遺物しか出土しないことから、埋没の始まりが7~9世紀頃で、15世紀後半頃には完全に埋没したと推定される。

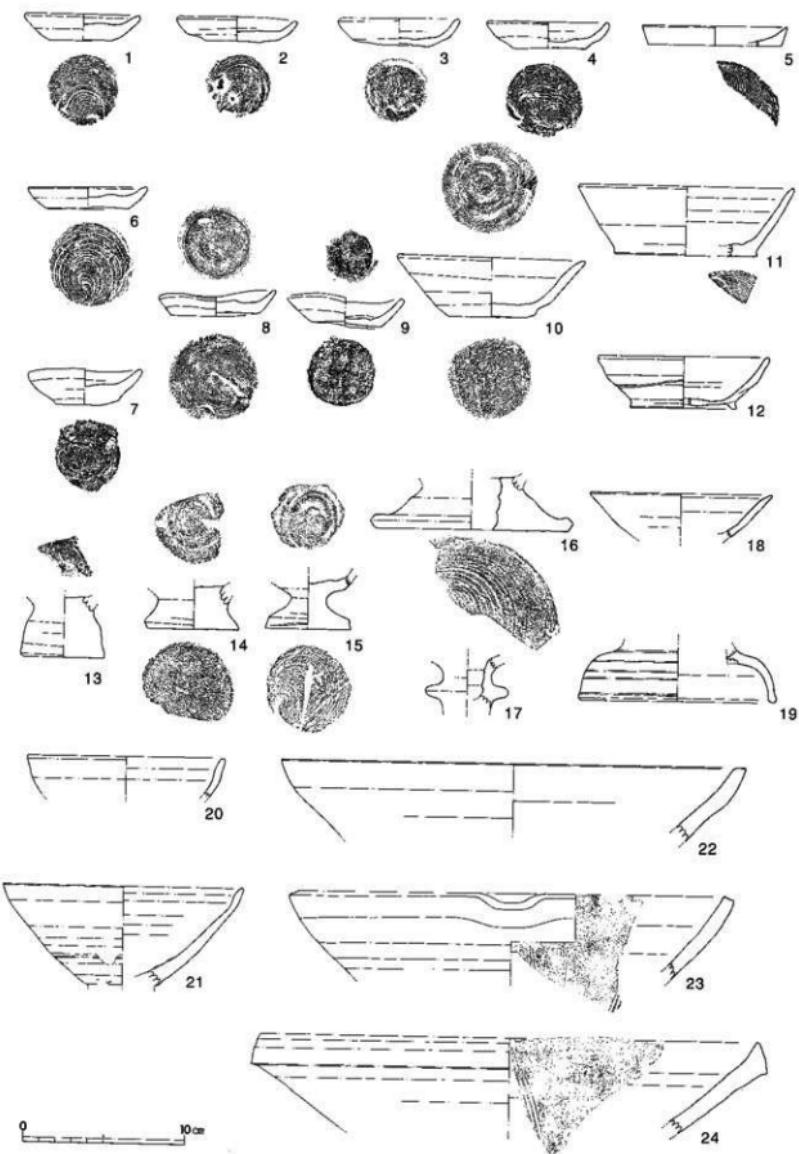
### 大溝03出土遺物 (第34~38図)

第34図1~16は土師質土器である。1~9は小皿で、このうち2~4、6は、内外面ともに回転ナデ調整を施し、底部には回転糸切痕が残る。1は内外面ともに回転ナデ調整で、底部は回転糸切の後、板目が残る。外方に直線的に立ち上がり、端部を丸く仕上げる。2は底径口径比が1対2で、口縁部は外反して底部との界線を明確にした後、内湾気味に立ち上がる。端部は平坦気味に作り、先端部はやや尖り気味である。3も底径口径差の大きいタイプで、口縁部に比べ底部は薄い。口縁部の立ち上がりは、外方に直線的に伸びた後、肥厚し内側にやや屈曲して外方に内湾気味に伸びる。口縁端部は平坦に仕上げられている。4は口縁部は外反した後、内湾気味に立ち上がる。端部は尖り気味である。5は底径口径差の小さいタイプで、欠損のため内面見込の調整は不明であるが、残存部では内外面ともに回転ナデ調整、底部に回転糸切を施している。口縁部は外方に直線的に立ち上がる。6は口縁部はやや内湾気味に立ち上がり、端部は尖り気味に仕上げている。7は内外面ともに回転ナデであるが、内面見込にナデを施し、底部は回転糸切の後、板目を残している。口縁部は外反した後内湾し、端部は丸く仕上げている。8は内外面ともに回転ナデ調整を施すが、内面見込みに沈線状の円を残す。底部は回転糸切を残している。口縁部は外方に直線的に立ち上がり、端部は平坦に仕上げている。9は内外面ともに回転ナデ調整を施すが、風化気味であるものの、内面見込には渦巻状の粗い回転ナデを施しているようである。口縁部の立ち上がりは内湾気味で、端部を肥厚し丸く仕上げている。底部は回転糸切の後、板目を残す。10~12は壺である。10は底径口径差の大きいタイプで、内外面ともに回転ナデを施し、内面見込に渦巻状回転ナデ、底部に回転糸切の後、板目を残す。口縁部は外方に直線的に立ち上がり、端部を丸く仕上げる。11は一部欠損しているものの、残存部では内外面ともに回転ナデである。底部には回転糸切を残す。口縁部は直線的に立ち上がり、端部を尖り気味に仕上げる。12は高台が付くタイプで、外面・断面に粘土の接合痕が残る。全面ナデで仕上げている。13~16は柱状高台である。いずれも外面は回転ナデ調整である。13は頸部が太く、裾が直立するタイプである。内面は粗い回転ナデで、底部は風化のため調整不明である。14は頸部が太く、裾が広がっていくタイプで、内面は渦巻状回転ナデを施し、底部に回転糸切を施す。15は頸部が細く、裾が大きく広がっていくタイプで、内面は渦巻状回転ナデの後ナデを施し、底部は回転糸切の後、板目を残す。16は内面の調整は風化のため不明であるが、底部には回転糸切を施している。大型のタイプで、裾が大きく広がり、端部を肥厚し外反させている。17は青磁で頸部に凸部を作る。淨瓶と考えられる。18は口禿の白磁で、内湾気味に立ち上がった後、外方に直線的に広がる。19は内面露胎の青白磁の蓋で5条の沈線を施す。肥厚する口縁部はやや外方に広がり、端部に平坦面を作る。20は古瀬戸または中国製の天目茶

105.00m  
B



第33図 大溝03土層断面図

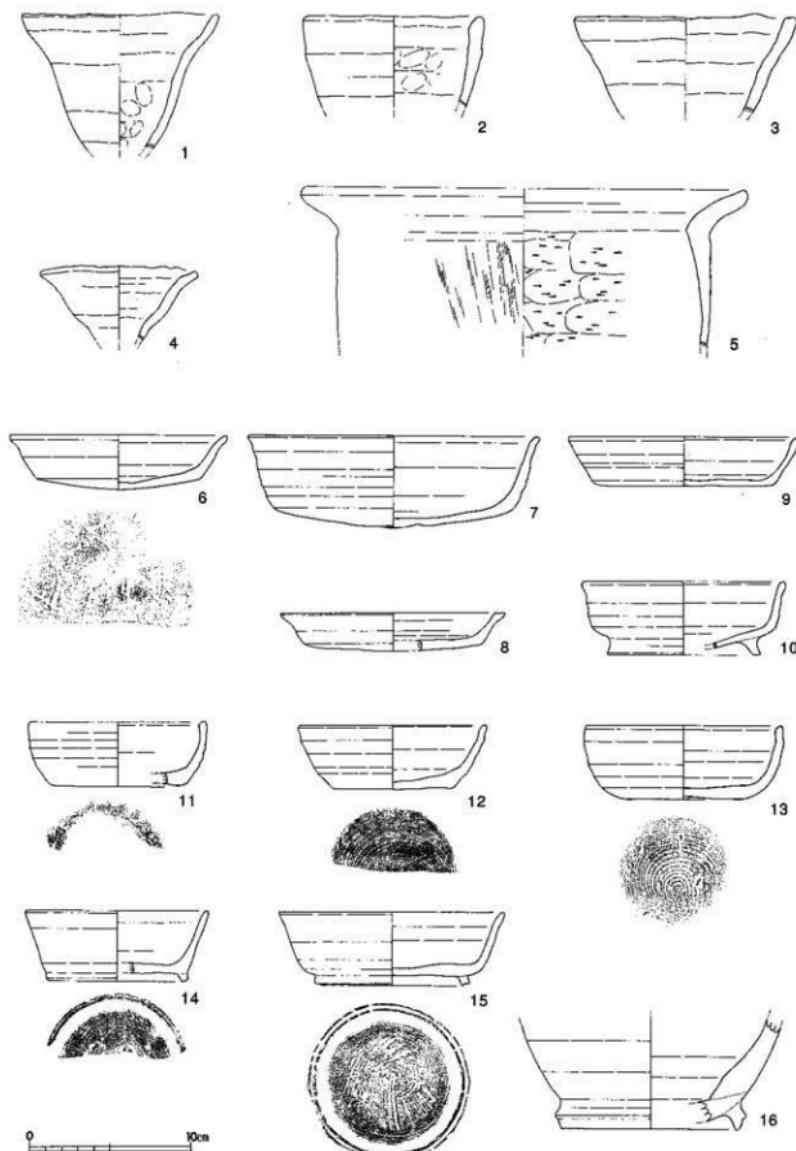


第34図 大溝03出土遺物（1）

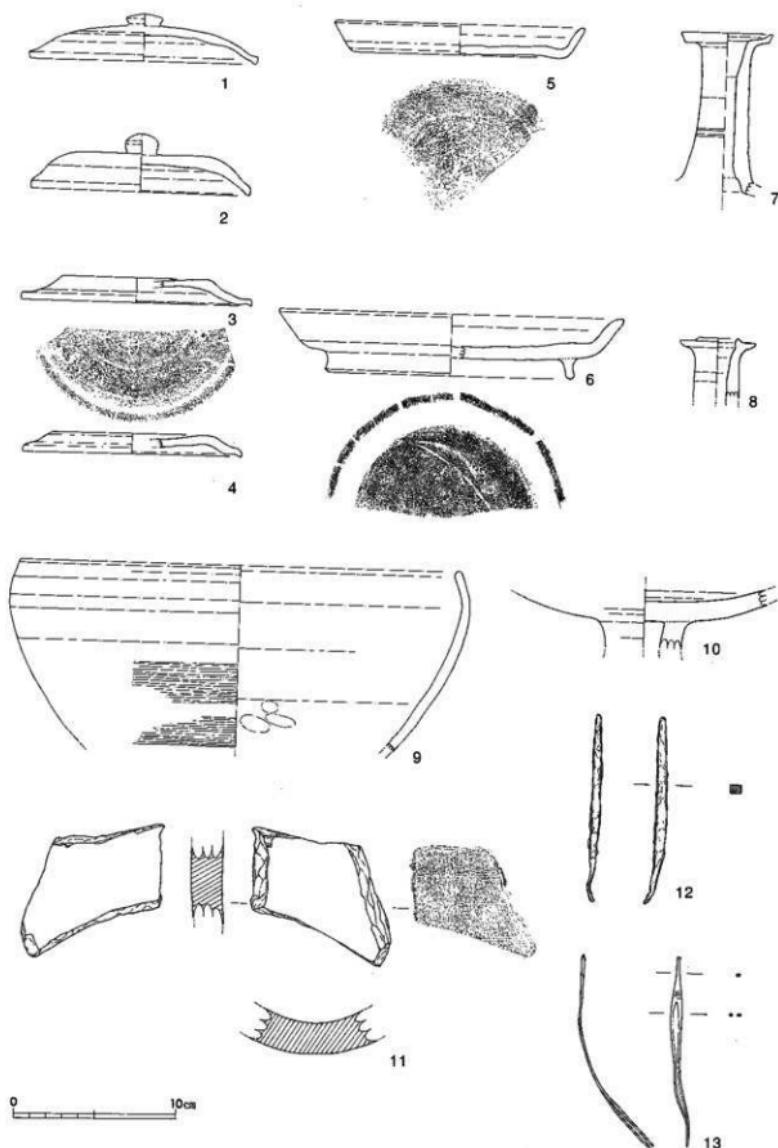
碗で、口縁部は内湾した後外傾する。端部は丸みを帯びる。21は古瀬戸の平塊で、口縁部は内湾気味に立ち上がった後、外方に直線的に伸び、内側に屈曲して外方に伸びる。底部は露胎で、粗い回転ナデを施すが、高台周辺は回転ヘラ調整している。22は常滑系陶器で、ナデ調整を施すが、体部外面は粗いナデを施している。口縁部は外方に直線的に伸びた後、内側に屈曲して外方に伸びる。端部は平坦面を呈する。23~24は備前の播鉢で、調整は内外面ともにナデを施す。23は乗岡実氏の備前焼編年の中世2期（13世紀後半～14世紀前半頃）の遺物で、口縁部は内湾気味に立ち上がり、端部を平坦に加工している。注口が残り内面には描目を施す。24は乗岡氏の中世3期（14世紀後半～15世紀初頃）の遺物で、口縁部は肥厚しながら外方に直線的に伸び、内側の突出が強調されている。内面には描目、外面には重ね焼きの痕跡が残る。

第35図1~4は製塙土器である。1は内外面ナデ調整であるが、内面底部はナデ及び指頭圧痕で調整している。口縁部は内湾した後外反し、内側に屈曲して外方に伸びる。端部は丸い。2は外面は未調整であるが、内面はナデを施し、体部からは指頭圧痕も交えている。口縁部は肥厚しながら若干の内湾を伴う。端部は外側を頂点として尖り気味である。3は内外面ともにナデで、口縁部は内湾した後外反し、内側に屈曲して外方に伸びる。端部は平坦面を作る。4は外面未調整で、内面にはナデを施す。口縁部は内湾した後外反し、内湾して再び外反する。端部は肥厚し、平坦面を作る。5は土師器壺で、口縁部はナデ調整を施し、体部外面にハケ目、内面にヘラ削りを施す。口縁部の立ち上がりは、外反した後若干内湾する。端部は丸みを帯びる。6~10は丹塗土師器で、全面を赤色塗彩する。6、7は内外面回転ナデ調整で、底部はナデを施し、6にはヘラ状工具痕が残る。底部は中央がやや尖り気味で、口縁部の立ち上がりは、外方に直線的に立ち上がった後外反する。端部はやや尖り気味である。8も内外面回転ナデ調整で、内面見込中央部と底部にナデを施す。底部がやや尖り気味で、口縁部は外方に立ち上がった後、肥厚し端部に凹み気味の平坦面を作る。9も内外面ナデ調整で、内面見込中央部と底部にナデを施す。口縁部は内湾気味に立ち上がり肥厚する。端部は丸く仕上げる。10は高台を付けたタイプで、内外面ともに回転ナデを施す。口縁部はやや外方に立ち上がり外傾する。端部は丸く仕上げる。11~16は須恵器である。11~14は内外面ともに回転ナデ調整し、底部に回転糸切痕を残す。11は内湾しながら立ち上がり、内傾して肥厚する。端部は丸く仕上げる。12は外反気味に立ち上がった後、外方に直線的に伸び、内側に屈曲して外反する。端部は尖り気味に仕上げる。13は内湾気味に立ち上がり屈曲して内傾する。端部は外側に尖り気味に仕上げる。14は高台を付けたタイプで、口縁部は高台接合部から外方に直線的に立ち上がり、端部は尖り気味に仕上げている。15は内外面ともに回転ナデ、底部に回転ヘラ切り痕を残し、高台疊付に凹みを作る。口縁部は外方に直線的に立ち上がり、屈曲して外傾する。端部は尖り気味に仕上げている。16は高台の付く壺類底部で、内外面をナデ調整している。また内外面には粘土の接合痕が残る。立ち上がりは内湾気味で、付け高台には1条の突出部を作っている。

第36図1~10は須恵器である。1~4は蓋で、1は内外面ともに回転ナデを施し、口縁部は内湾した後、外反し下方に折りかえる。端部は尖り気味である。つまみは扁平な宝珠状を呈す。2、3は内外面ともに回転ナデ調整を施すが、天井部は風化のため調整不明である。2は平坦な天井部から内湾した後、若干外反する。端部は内側がやや尖り気味である。つまみは宝珠状を呈す。3は平坦な天井部か



第35図 大溝03出土遺物 (2)



第36図 大溝03出土遺物 (3)